

第2章 京都市の維持向上すべき歴史的風致

1 京都市の全体像

(1) 概要

京都市の維持向上すべき歴史的風致は、京都を育んだ豊かな自然と、千年をこえる首都の歴史と文化が織りなす都市空間および歴史文化遺産群、伝統を受けつぎ革新を求める人々が営む文化や行事、芸術が一体となって形成している、日本はもとより世界にも類を見ない市街地の環境である。

(2) 京都と自然

平安京遷都に際して、「山川もうるわしく」と詔にあるなど、京都盆地の自然の美しさがくり返し強調されている。立地の理由には、もちろん政治的・軍事的な要因や呪術的なものもあったが、しかし東に鴨川、西に山陰道、北に船岡、南に巨椋池があり、「四神相応」の地形となっていること、さらには北の船岡、東のかぐらおか、西の双ヶ岡の「平安京の三山」が都の地の「鎮め」をなしていたことなど、古代的な世界観のもとで、山々とは特に大切な意味をもっていた。

世界文化遺産「古都・京都の文化財」のほとんどが周りの山河と深くかわり、自然とともに豊かな歴史と文化を育んできたが、平安京を京都たらしめたもの、また現在でも京都を京都たらしめているものは、京都を包みこむ美しい自然なのである。京都とその自然は、日本を代表する景観であり、日本の原風景といつてよい。

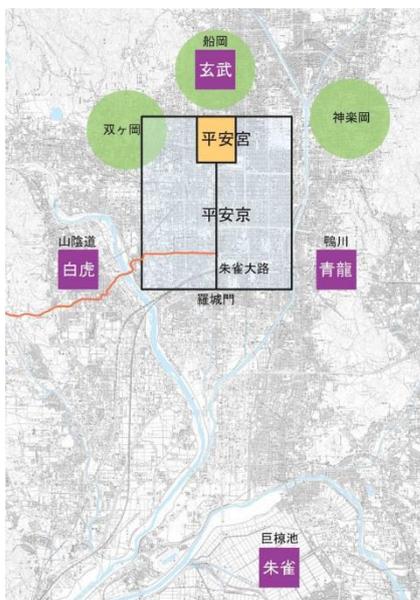


図2-1 京都と自然

(3) 京都の都市構造

平安京以前から京都盆地には田畑が広がり、村々が点在していた。八坂神社のように、地域の人々の信仰を集める社もあった。

平安京は、律令国家の首都構想のもと、美しい山並みに囲まれた要害の地に建設された日本的な都城であった。その条坊制の都市システムは、藤原京から平城京、長岡京、平安京へと百年にわたって経験を積み重ね、工夫を加えてきた都市計画技術の精華といつてよい。平安京そしてその都市理念は時代を越えて生きつづけ、鎌倉や江戸などの都市の理想像となったことも注目される。

京都は中世から現在にいたるまで平安京の大路・小路の上に都市空間をつくり続けてきた。ただ京都の歴史には、衰退・成長・再生・拡大・変容など、いくつもの紆余曲折があった。大きなできごととして、右京の衰退、一条北辺への拡大、白河・鳥羽の都市開発、室町幕府の大規模開発（土御門東洞院内裏・相国寺・室町殿の造営）、戦国動乱による衰退（小京都化）、織田信長や豊臣秀吉・徳川家康による近世城下町化、さらに近代の都市計画事業などがある。また底流として、平安京の解体と中世都市化、近世京都の高密化と洛外への拡大をもたらした、辻子（突抜・新道・路地）、巷所（道路を宅地化したところ）を創り出した都市住民による「まちづくり」がある。

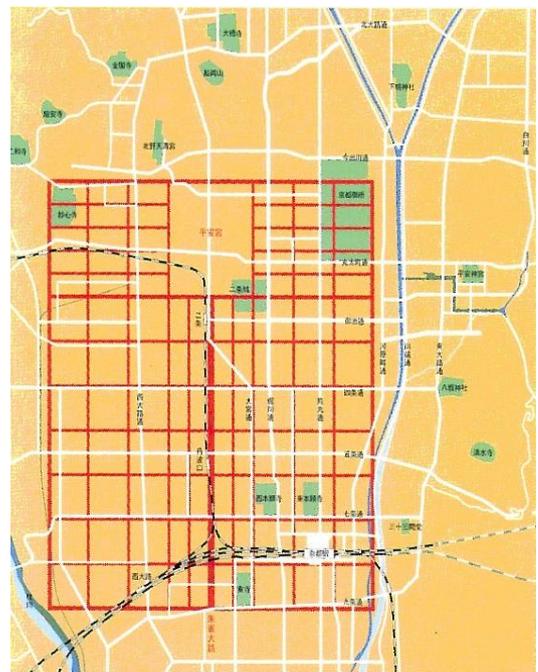


図2-2 平安京と現在の重ね図

出展 「平安建都1200年記念 甦る平安京」

こうした移りかわりのなかで大きく変貌を遂げながらも、京中と京外からなる都市構成と格子状の都市構造は、近代そして現代に受け継がれ、山紫水明の盆地景とともに歴史的風致の基盤を形成している。

(4) 建築遺産と町並み

前近代の京都は、そうした基盤の上に営まれた、それぞれが都市とあってよいいくつもの地域からなっている。上京と下京、東寺、清水、祇園、吉田、北野、上賀茂、西の京、嵯峨、伏見、淀などである。規模の大きな上京は内裏・公家町や二条城周辺、西陣など、同じく下京は祇園祭の鉾町や東寺・東西本願寺の門前町など、いくつもの特色ある町々から構成されていた。これらの地域は、内裏と公家町、将軍御所と武家町、寺社と門前町、市場町、宿場町、港町などということもできよう。京都とは、それぞれ固有の歴史をもつ小都市群が、また洛中と洛外がゆるやかに結びついて作りあげた分散型ネットワーク構造の都市なのであった。

世界文化遺産や国宝・重要文化財の建造物は、三方の山々の山裾部を中心にこうした京都のいたるところに点在し、国内有数の歴史的建造物の集積する都市となっている。その特徴として、平安時代から近・現代まで1200年の各時代における日本を代表する建造物がみられること、また寺院・神社をはじめとして城郭、公家住宅、茶室、町家、近代の邸宅、学校、銀行、官公庁、博物館など、きわめて多彩であることなどがあげられる。さらに八坂の塔（法観寺五重塔）が地域のシンボルになっているように、多くの歴史的建造物は地域の歴史と文化と不可分にかかわっているのである。

歴史的市街地には、京都の町の歴史と文化の象徴ともいえる京町家が生き続けており、今日もなお多くの市民のくらしの場、生業の場として重要な意味をもつとともに、4箇所的重要伝統的建造物群保存地区をはじめ、繊細で風情のある町並み景観を形成している。

(5) 京都の文化

千年以上にわたって日本の首都であり続けた京都は、人とモノと情報が集中する場であった。京都は、東アジアはもとより広く世界の文化をおおらかに受け入れるとともに、新たな文化を創出し、また伝統文化を守り伝えてきた。そうしたなかで、おのずから特色あ

る京都のころをはぐくみ、生活や産業、また政治や宗教、芸術、学術などにおけるさまざまな相異を尊重し、それらを対比しつつ調和、共存させ、さらに大きく展開させる、広く豊かな「融和の文化」をつくりあげた。

また、京都文化の基層には公家・寺社・武家・町衆の文化、あるいは貴族・王朝文化と大衆・都市文化が混在しているが、それらもたがいに交流・刺激しあって、能・茶の湯・生け花、数寄屋建築などの芸術を創造した。

洛外の村々も、京都の文化に深いかわりがある。洛中の糞尿と洛外の^{そさい}野菜のエコロジカル・サイクルが成りたっていたことは、日本ではじめての「エコ社会」の実現として高く評価されるし、また京都の夏を飾る五山送り火も、洛外の村々が洛中に向けて行ったお盆の一大イベントとすることができる。

京都は、昔も今も、貴族と大衆、都市と田舎、唐風と国風、洋風と和風、古典と数奇などさまざまな特色をもつ文化が混在、共存する場所である。多彩な文化を受け入れ、育て、発信する京都の核をなしているのは、伝統と革新、その均衡を尊ぶところであろう。

茶の湯や生け花は、くらしのなかに年中行事として、また社交として深く組みこまれ、京のくらしや京町家の魅力ともなっている。「立花」の^{りっか}伝統を伝える六角堂が、かつて下京の惣堂として町衆の寄りあいの場であり、またその鐘が下京の人々に時を知らせる鐘、町衆決起の鐘であったことや、世界無形文化遺産への登録を目指す祇園祭が、八坂神社の祭礼であるとともに、戦国時代から都市民衆の祭礼となっており、コミュニティや町の空間と深いかわりをもってきたことは、くらしと生活文化と町が一体であることを端的に示している。

いつの時代にも伝統文化と現代文化を合わせもつ京都では、さまざまな工芸品が、京都のみならず日本全国、さらには東アジアに向けて生産・販売された。西陣織や扇などのように、京都ブランドというべき産業も生まれ、早くから同業者の集住する地域（同業者町、工業団地）が発達する。これもまたくらしと生活文化と町の一体化といえよう。

芸術や芸能、工芸、祭礼行事、くらしを支える基盤は、都市民衆自身がたがいに助けあい、連携・協働して創りあげた町（地縁生活共同体）であった。そしてまちづくりも、住民と町が主体となって推進し、統一

感のある京町家とその町並みを形成した。コミュニティ主体のまちづくりは、近代における日本最初の小学校建設や、現代のまちづくり、京町家再生の活動などへ、^{えんめん}連綿と受け継がれ、これもまた京都の伝統となっている。

このように京都の町々では、1200年をこえる長い歴史に培われた多彩な文化が歴史的風致の背景となり、日々の暮らしや生業などの営みをとおして京都にしかみられない品格と風情を醸し出している。

それぞれの時代の特色を帯びた情趣豊かな町々と歴史的建造物が、ともに山紫水明の自然に包まれて「重ね」（重層）と「合わせ」（対比）の模様を描いている融和の姿こそ、日本にも、また世界にも類を見ない京都らしい歴史的風致である。

2 京都市の維持向上すべき歴史的風致

全体像で述べているように、京都は1200年を超える歴史のなかで各時代の有形無形の歴史的資産が重層的に重なり合い、かつての都の後背地としての北部、西部の山間地を含む広大な市域全体に京都市の歴史的風致が存在している。それらは個々の地域に留まらず、ゆるやかに結びつき、全体として京都の歴史的風致を形作っていることが京都の特徴とも言える。以下に具体の「京都市の維持向上すべき歴史的風致」を示していくが、ここでは大きく3つの考え方でテーマを設定している。

1つは、かつての洛中を中心に展開され受け継がれてきた京都のまちの都市文化である宗教文化、市民の生活文化、生業に関する文化、伝統文化を「祈りと信仰のまち京都」「暮らしに息づくハレとケのまち京都」「ものづくり・商い・もてなしのまち京都」「文化・芸術のまち京都」と題して具体事例により示していく。

2つは、かつては洛外に位置する地域として都と密接に関わってきたまちの歴史的風致を「京郊の歴史的風致」と題して具体事例により示していく。

3つは、時代を切り口として、明治時代に入り東京に遷都されて以降の近代化を推進した伝統と進取の気風に培われた営みを「伝統と進取の気風の地」と題し、示していく。

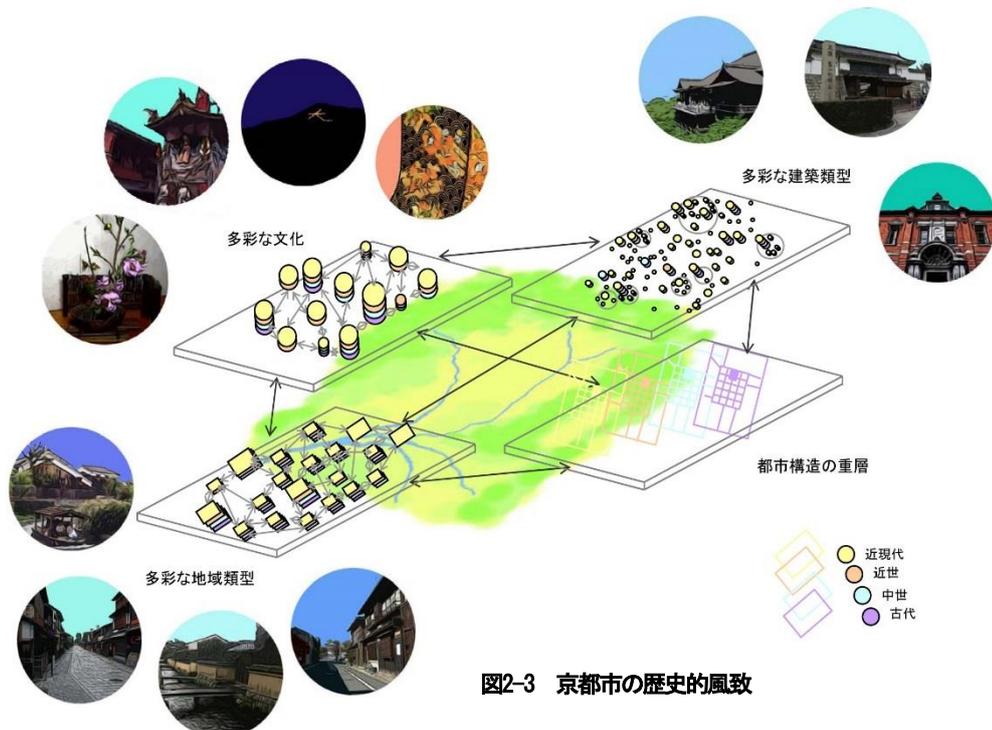


図2-3 京都市の歴史的風致

—祈りと信仰のまち京都—

(1) 本山と聖地

京都は、延暦13年(794)の平安遷都より、明治になって東京遷都が行われるまでの間、首都機能を有していたため、仏教の各宗派の総本山や大本山が多く、寺格が高く威厳にみち、荘厳かつ壮麗な寺観を誇ってきた。清水寺や教王護国寺(通称、東寺)、本願寺(通称、西本願寺)、天龍寺などの世界遺産をはじめとして、南禅寺や知恩院などがその代表として知られている。他にも、「西国三十三所」に代表されるような霊場などもあり、京都はそれらの聖地を目指して来訪する多くの人々を迎えてきた。

また、古来より京都に存在する上賀茂神社や下鴨神社、全国の多くの稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社など、日本を代表する神社が多く存在する。これらの神社は、「神山」や「糺の森」といった、人々の信仰の対象や社叢としての豊かな自然環境とともに、古くから人々の信仰を集めてきた。

これらの本山などの聖地への参詣は、名所見物も兼ねており、「宗教の総本山」としての機能を歴史的に培ってきた京都の歴史を示す一つの側面と言える。

ここでは、京都が持つ「宗教の総本山」としての位置付けによって形成されている歴史的風致について、その背景と、代表的な例を示していく。

ア 背景

幕藩体制下に成立した檀家制度とそれを受けた宗門改は、当時の日本の人々のほぼ全てを仏教徒と化した。それらの人々が信仰する本山のあるところが京都であった。さらに、常日頃は拝むことのできない秘仏として、本尊や什宝の開帳が行われるようになり、人々がこれに参詣するという制度が定着していき、「本山まいり」に拍車をかけた。これにより、東西本願寺をはじめ諸本山の近辺や、街道筋の誓願寺周辺、清水寺に連なる寺院付近には、旅人のための宿が建ち並ぶようになった。

また、「巡礼」という信仰があり、最も歴史のあるものに「西国三十三所観音霊場」と呼ばれる、近畿2府4県他に点在する観音霊場を巡るものがある。そのうち京都には番外を含めて8箇所があり、多くの善男善女が訪れた。これになぞらえて、近世から盛んになった「洛陽三十三所観音」や「弁才天まいり」などもあり、近世に入って成立した「四十八願寺」は、名釈迦、名薬師、名弥陀、名不動、名地藏

などを巡るものとして、18世紀ごろから頻繁に行われた信仰である。

京都市内には、平安遷都より形成されてきた名所や旧跡が数多くあり、また四季折々の自然を楽しむことができる多くの景勝地があったこともあり、「都名所図会」等の出版によって、京都への旅に多くの人々を駆り立て、本山まいりや巡礼は、名所見物という娯楽を兼ねた信仰の旅として定着していった。

イ 具体事例

(7) 本願寺への本山まいりと本願寺界限

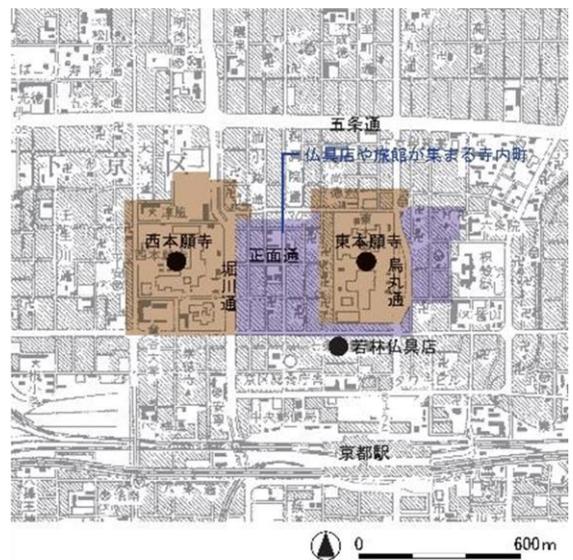


図2-4 本願寺と本願寺界限

東西本願寺への「本山まいり」は江戸時代から行われており、現在でも両本願寺は「本山まいり」の盛んな寺院として有名である。

特に報恩講(御正忌報恩講)は、東西本願寺で行われる年中行事の中でも最も重要で荘厳な法要である。報恩講とは、浄土真宗の宗祖親鸞の年忌法要で、没後33年後の永仁2年(1294)に、本願寺第三世覚如が「報恩講式」を撰述したことを起源とし、それより現在に至るまでもっとも重要な法会として、本山及び末寺で厳修されている。東本願寺(真宗大谷派本山)では11月21日~28日、西本願寺(浄土真宗本願寺派本山)では1月9日~16日の間に行われ、東西本願寺やその界限では、溢れんばかりの参拝者を迎える。

天正19年(1591)、豊臣秀吉の命により京都六条堀川へ本願寺が移転し、周辺には、坊官や

商工業者が移住し、寺内町（西寺内）の町並みが形成されていった。なお、本願寺の歴史は、弘長2年（1262）に没した親鸞の遺骨を改葬し廟堂を建立したことから始まる。その後、豊臣秀吉に保護され、現在の地に移転するまで、いくつかの地を巡った。

慶長7年（1602）、徳川家康により烏丸七条の地を与えられ、東本願寺が建立され、西本願寺、東本願寺に分派することになった。また、寛永18年（1641）の幕府の寄進によって東本願寺寺内町（東寺内）が形成され、西本願寺寺内町（西寺内）とともに寺内町として発展していった。

この界限には、諸国から参詣する多くの信者のために、古くから多数の宿が設けられており、現在でも旅館が多数集まった町並みの姿を見せている。また、本願寺の寺内町である特徴として、仏具（仏壇、法衣、数珠、表具）を扱う見世造りの商店も多数集まっており、天保元年（1830）創業の若林仏具店（国・登録有形文化財）などは、昭和2年（927）の建造物を今に残しており、その代表的なものといえる。京仏具は京都の伝統産業の一つであるが、同地区はその中心となっている。通りに並ぶ仏具店の店頭には、きらびやかな仏具や数珠等が並べられ、お香の香りが界わいに漂っており、寺内町の雰囲気をもより一層醸し出している。



写真2-1 本願寺寺内の町並み

仏具店や旅館は同じ業種が集中することによって、寺院を中心とした独特の町並み景観を形成している。他にも、仕舞屋造の家々や中小寺院の表構え、大寺院のいらか 藁 などにより形成された町並みは地区に固有のもので、その中で僧侶や人々は日々の生活を行い、これらの寺内町の営みによって醸し出される風情の中で、訪れる本山まいのり

信者達は、仏具店等の歴史的な町並みを行き交いながら、本願寺の雄大な建造物への参拝を通じて、信仰を深めていく。

(イ) 八坂神社から清水寺へ

東山山麓の八坂神社や法観寺、清水寺は、古くから信仰の地として、そして都を代表する風光明媚な名所として、数多くの参詣客や見物人を集めてきた。今も国内外からたくさんの老若男女が訪れる京都第一の名所である。

そのなかで、人々から親しみを込めて「祇園さん」と呼ばれている八坂神社は、創立年代及び由緒には諸説あるが、社伝では高麗より来朝した八坂氏祖が、斉明天皇2年（656）に、新羅国牛頭山ごずさんに坐す素戔嗚尊すさのをみことを祀ったのが始まりとされている。盛夏に行われる祇園祭で広く知られているが、後の「京都の祭礼」でも示すとおり、大晦日から元旦にかけて境内で焚かれるおけら火を火縄に移して家に持ち帰りその火で雑煮を炊いて無病息災を祈る「おけらまいり」でも知られている。

また、境内に続く円山公園（国指定名勝）は明治6年（1873）にぎおんかんしんいん 祇園感神院の坊舎の跡地、円山一帯の寺社境内地、安養寺六坊の地などを公園地に指定したことに始まり、枝垂桜が有名な桜の名所である。この枝垂桜は、江戸時代に宝寿院に植えられたもので、廃寺となってからも祇園の夜桜として有名であった。現在の桜は二代目である。



写真2-2 産寧坂の町並み

八坂の塔で知られる法観寺は、平安京以前の創建と伝えられる寺院で、寺伝では、聖徳太子が五重塔を建て仏舎利を納めて法観寺と号したという。創建には渡来系豪族の八坂造やさかのみやつこが関わったという。

町家の屋根越しから見え隠れする八坂の塔の力強い姿は、この地域のシンボルとして重要な歴史的風致の構成要素となっている。



写真2-3 八坂の塔

懸崖造の本堂（国宝）で有名な清水寺は、「清水寺縁起絵巻」によると、鹿狩りにきた坂上田村麻呂が、この地で修行中の延鎮に殺生を戒められ、延暦17年（798）二人で千手観音の像をつくり、一堂を創建したのが始まりとされる。幾度もの焼失と再建を繰り返したため、室町後期に遡る仁王門、馬駐が最古の遺構である。現在の伽藍は、寛永期に徳川家光の援助により再建された本堂、三重塔などが中心となっている。北法相宗の本山であり、また、観音信仰の盛隆にともない、近世には西国三十三所札所となった。線香の煙が漂う本堂の中で手を合わせる巡礼者も多い。他にもこの地域には、名所や旧跡が数多く存在する。

清水寺の表参道は、昔から清水坂とされており、都からの参詣者は、五条通（現松原通）から五条橋を渡り、清水坂を上る道であった。近世になると、八坂神社から産寧坂に至る参詣道が、東山めぐりの主要な道の一つとなり、道の賑わいは、洛中洛外図や東山遊楽図にも取り上げられた。その後二年坂が登場し、現在の参詣道へとつながっていった。これらの参詣道には茶屋などが多く立ち並んでいたが、天保14年（1843）の記録「諸商売人別御改書」には、清水門前町において茶碗商売や茶店、人形屋などがあったことが示されており、この頃既に参詣客目当ての土産屋などが形成されていた様子が分かる。

現在、この参詣道に当たる産寧坂や二年坂付近

は、江戸時代から昭和初期までの伝統的な建造物が立ち並び、歴史的な町並みを形成している。それらの伝統的な建築物の店先で、京人形や清水焼等の伝統工芸品を販売する土産物の店舗が営まれている。中には、今なお店の奥で伝統工芸品を生産しているところもある。

このように、一帯は寺社をはじめとしたいくつもの名所があり、それをつなぐように参詣道が形成されている。そこには、土産物の店舗の店先に工芸品が並べられている風景があり、歴史的な町並みに彩りをもたらし、参詣道を行き交う参詣者や見物客等の人々に、古都の風情と心の安らぎを感じさせている。

(ウ) 下鴨神社と糺の森

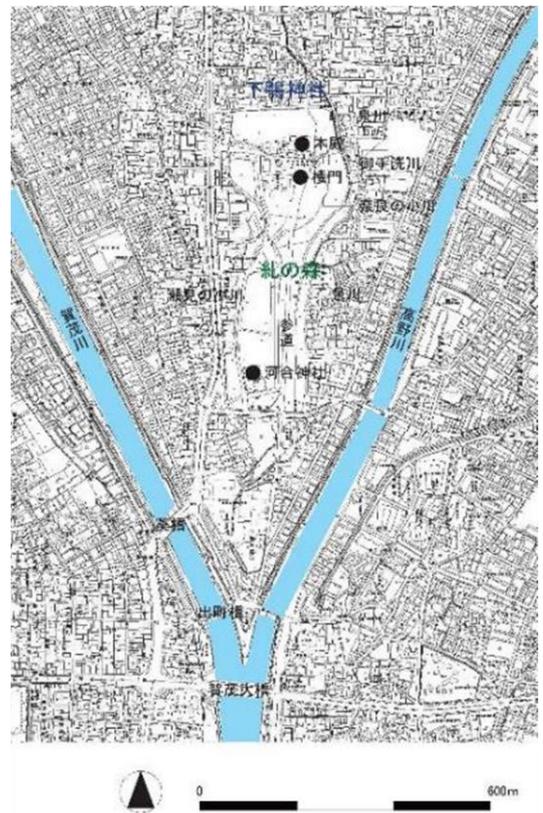


図2-6 下鴨神社と糺の森

下鴨神社は、鴨川と高野川にはさまれた、二つの川が合流する場所にある。上賀茂神社とともに、この地を占有していた古代の賀茂氏の氏神を祀る神社であり、両社をもって一社のような扱いをされてきた。わが国最古の神社の一つである。

糺の森は、下鴨神社の境内にあり、社叢としての役割を果たし、自然崇拜の場となっている。

下鴨神社本殿から南へ、河合神社に至る境内の12ヘクタールにおよぶ森で、古代山城北部が森林地帯であった頃の植生と同じ生態が保たれている貴重な森林であり、国の史跡（賀茂御祖神社境内）に指定され保護されている。樹林の間には奈良の小川、瀬見の小川、泉川、御手洗川の清流があって四季を織り成し、源氏物語、枕草子をはじめ数々の物語や詩歌管弦にうたわれている。そして新緑の5月には、糺の森の豊かな森は両賀茂社の祭事である葵祭の舞台となる。葵祭に先立ち行われる流鏝馬神事や御蔭祭、葵祭当日の路頭の儀では、豊かな新緑の中、ゆるゆると牛車が進む。他にもここでは様々な祭事が行われる。

また、糺の森は、神聖な信仰の場であると同時に、古くから市民の遊興の場でもあり、現在も日常生活と密接に関係し、市民に親しまれる憩いの場でもあり、「茶会」や「納涼」などが行われていた。

糺の森の御手洗川や泉川での納涼は江戸時代から有名で、寛政11年（1799）に発行された「都林泉名勝図会」にもその様子が描かれており、また明治期の納涼茶会の様子が記録の中に残されている。

その後、時代の経過とともに、市民の行事は一時衰退していたが、それを平成3年より約100年ぶりに再興したのが、「蛍火の茶会」である。

糺の森に蛍が飛び交う雅な恒例行事、「蛍火の茶会」は、初夏の夕暮れの六月初旬に開催される。楼門前には「糺の森納涼市」として、京の老舗が昼過ぎより開店し、所狭しと軒を並べながら20店舗余りが出店される。夕方になると、中門前において奉告祭が斎行され、橋殿・細殿にて「茶席」も開かれる。午後6時頃には、神服殿において十二単の着付けと王朝舞や箏曲の演奏が行われ、午後8時頃には、約600匹の蛍が大籠より御手洗川に放たれる。

かつては清流に蛍の姿がたくさん見られたようだが、その後の時代の変化により茶会も行われなくなり、蛍の姿もなくなった。しかし、地元の農会や氏子の方々の協力で泉川流域の清掃を繰り返し、蛍の幼虫を放ったところ、糺の森のあちらこちらに蛍火の飛び交うのが見られるようになり、「蛍火の茶会」として再興することができるよう

になった。

また、納涼市についても、江戸時代から、京の夏の避暑地として糺の森を流れる川の辺に茶店が建ち並び、庶民の納涼場として船を浮かべた茶会のほか、能（糺能）や相撲の催しがあった。その後の時代の変化により、納涼市も一時衰退したが、懐かしい風情が「糺の森納涼市」として再興された。

この他にも「糺の森」では、葵祭、御手洗祭、成人祭など、その豊かな自然を舞台とした年中行事が行われる。また、日常においても、森林浴や子供の水遊び、早朝の散歩など、市民の生活と密着する活動が行われている。さらに、糺の森は、神官の他にも、人々の活動によって守られていることが、「蛍火の茶会」からも分かる。

これまでに示したような、信仰と歴史に培われた様々な活動は、古くから人々の信仰の対象となっている糺の森の、今なお「崇拜」される豊かな自然環境、木漏れ日の柔らかい光や澄んだ空気、小川のせせらぎの音色など自然の美しさのなか、下鴨神社を訪れる人々は、原生林の息づく糺の森を歩きつつ、信仰と歴史の深さを感じるのである。



写真2-4 糺の森



写真2-5 糺の森（航空写真）

ウ 本山と聖地に見る歴史的風致

このように京都において行われてきた「本山まいり」や「巡礼」は、今なお人々の心のよりどころと安らぎを求める活動として残り、その核となる寺社や名所とその周囲に形成されてきた門前町の営み、信仰の対象として守られてきた森林とそこで行われる人々の活動がそれぞれ固有の世界を形成している。

そして、それぞれの地域は名所見物を兼ねた信仰の旅により、都市構造として結びき、また、参詣という営みを行う人や修行のため京都を訪れる人々の営みが宗教関連の工芸品をはじめ、参詣客が求める伝統工芸品の販売、それらを作る人々の生業に結びつき、様々な道をたどって京都のまち全体に還元されるといういわゆる宗教都市としての様相を形成している。

今日でも京都の歴史的な町並みのどこかで、どこからともなく現れた托鉢僧たくはつそうの読経の声を聞くことができる。また、行き交う袈裟姿のお坊さんを見かけることができる。また、門前で造られている伝統工芸品の中に、京都で培われてきた伝統の技を見る。

信仰の場である寺院やそれを取り巻く地域、そしてこれらに関連する伝統産業が、京都の歴史の中で重要な地位をしめ、現在も文化の担い手の一つとして京都が代表的な宗教都市としての位置づけを持つ都市であることを日々感じることができる。

(2) 祈りの場

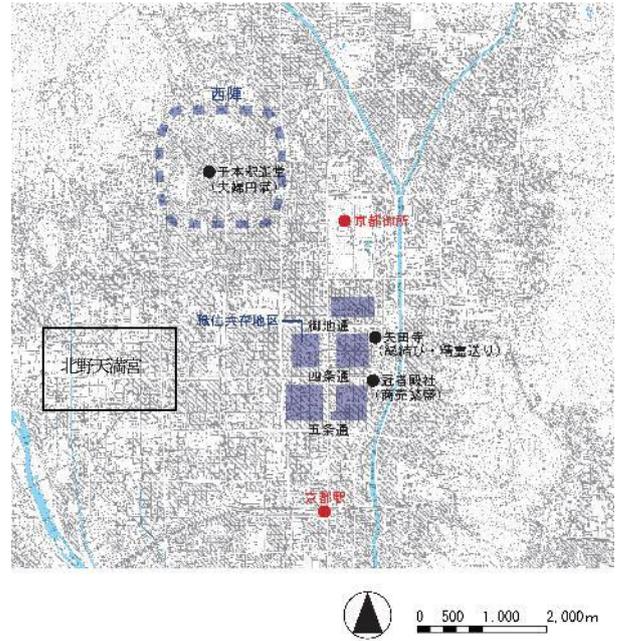


図2-7 祈りの場(例示)

京都には、(1)で示したような寺社の他にも商売繁盛のご利益で有名な毘沙門堂や神経痛・腰痛平癒へいゆの善峰寺、方除けの城南宮をはじめ、冠者殿社かんじゃでんしゃ、大報恩寺(千本釈迦堂)などのように、古くから市民生活と密接な関係を持ち、町の人々の信仰を集めた庶民の寺社ともいえる地域の寺社がある。ここでは、これらの生活に溶け込んだ寺社で行われる信仰活動によって形成される歴史的風致を、生業や日々の暮らしという視点で例として示していく。

ア 具体事例

祇園祭の際に神輿みこしが渡御し、還幸まで留まる場所で知られる祇園八坂神社の御旅所の横に並んで、小さな祠が鎮座している。その祠が冠者殿社かんじゃでんしゃと言われ、商売の神様として信仰を集めてきた。かつては烏丸高辻にあった八坂神社大政所御旅所に鎮座していたが、天正年間に、万寿寺通り高倉で今は地名として残る官社殿町に遷され、さらに慶長年間に今の地に遷されたと言われている。

江戸時代には、陰暦10月20日に「誓文払い」とか「えびす講」と称し、商人や芸妓がここに参詣するのがならわしであったようで、近世の資料(日次紀事)に冠者殿が信仰を集めるに至ったわけが記されている。すなわち、「源頼朝の家臣であった土佐坊昌俊が頼朝の命を受け、義経成敗のため入京する。義経は土佐坊昌俊を招いて、何のための入京か問い

ただしたところ、頼朝の代参へ熊野詣の途中立ち寄ったと答え、嘘偽りのない証として熊野牛王の裏に誓文まで記して義経に渡した。しかしその夜、義経が滞在していた堀川御所に夜討ちをかけたところ、待ち構えていた義経にあえなく返り討ちにあった。」この土佐坊昌俊を祀ったのが冠者殿であるといわれており、御祭神は素戔烏尊すさのをみことの荒魂を祀っているが、この「日次紀事」の説明が一般的によく知られており、彼が誓文を破った罰を受けたことにかけて、商売のかけひきに嘘を言った罪を祓うために、商人の信仰を集めたと伝えられている。

つまり、この日は商家の罪滅ぼしのための精進日となった。

現在でも、毎年10月20日には、商売人が商売上の嘘を祓い清めてもらうための参詣が行われ、今でも生業の祈りの場として人々の信仰を集めている。

上京区の大報恩寺は、真言宗智山派の名刹で、本堂(国宝)は安貞元年(1227)の創建時のままの木造建築である。

本尊の釈迦如来が有名なために、「千本釈迦堂」の通称で呼び親しまれ、夫婦円満のご利益があるとのことから、多くの人々が参拝に訪れており、近所のおかみさんたちもお参りに訪れる。

2月の「節分会(通称:おかめ節分)」は、おかめの面をつけて鬼を笑わせる楽しい行事として知られ、紅白のおかめ装束をした男女の練り歩きが見ものであるが、そこには賢妻おかめの秘話※1が残っている。

※1 賢妻おかめの秘話

本堂建築の際、長井高次という大工が棟梁として采配をふるっていたが、4本の心柱のうちの1本をうっかりと短く切ってしまった。窮地に追い込まれた夫に、おかめは「4本とも短く切り、頂上部にます組をつけて高さを補えば」と助言。これが功を奏して、本堂は無事完成したのだが、妻の入れ知恵が世間にばれては棟梁の恥と、1227年、上棟式が営まれたが、おかめは晴れの式を待たず、上棟式前夜に自害してしまったという。この悲しい美談から、夫婦円満のご利益があるとの信仰が広まった。

また、年中行事の一つとして有名な12月の「大根炊き」は信徒の奉仕により、ふるまわれる。「大根炊き」は、鎌倉時代に行われた厄除け祈願が始まりであり、生の聖護院大根も並べられており、中風・諸病を封じるといわれている。

千本釈迦堂の界限は、千本釈迦堂や北野天満宮などの市民の信仰を集める寺社が建立され、それらの門前町として形成された歴史の古い市街地である。

また、当地区は西陣機業の集中する市街地でもあり、その関連業も含む同業者町が形成され、職・住が共存した趣のある町並みを作り上げてきている。これらの町並みを背景に、日々お参りに訪れる人があり、年中行事の一つである大根炊きや節分会には多くの参詣者が訪れ、古くから伝わる民俗信仰を深めている。

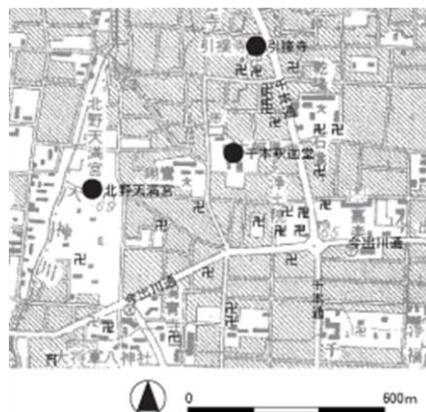


図2-9 千本釈迦堂詳細



写真2-8 大報恩寺(千本釈迦堂)

中京区の寺町通りや新京極通りには、いくつかの寺社が存在している。中京区寺町に位置する矢田寺もその一つであり、人々が気軽に訪れることができる。

矢田寺は、紫陽花で有名な奈良県(大和郡山形市)にある矢田寺の別院として、承和12年(845)満米上人まんまいしょうにんと小野篁たかむらにより五条坊門に建立され、天正18年(1590)、豊臣秀吉の命により現在地へ移転した。

金剛山矢田寺と号する西山浄土宗の寺で、通称、矢田寺の名で親しまれている。

本尊の地藏菩薩だいじやくじざうは代受苦地藏とも呼ばれ、地獄で人々を救う地藏として信仰を集め、名地藏の一つとして江戸時代の文献に記述が見られる。

現在、地神として土地豊饒と家宅の永安を守り、財を蓄え疫病を治すともいわれ、厄除け、開運、安産など諸願成就の信仰を集め、参拝客が絶えない。

また、境内にある梵鐘は、六道珍皇寺の「迎え鐘」に対して、「送り鐘」と呼ばれ、死者の霊を迷わず冥土へ送るために撞く鐘として、死者が出たときやお盆に撞く慣わしがあり、人々から信仰されている。お盆の精霊送りには、多くの参拝者で賑わい、精霊を送りに多くの参詣客が訪れて鐘を撞く。その鐘の音色は、先祖への思いを深く感じさせる。



写真2-7 冠者殿社



図2-8 矢田寺・冠者殿社

イ 祈りの場に見る歴史的風致

京都には古くから、まちのそこそこに庶民の信仰を集めた寺社や町堂とでもいうべき寺院が数多くあり、地域の中心的な役割を担っているものがある。また、生業という視点から人々の信仰を集めている寺社なども数多くあり、古くから庶民の参詣で賑わってきた。これまでにあげた寺社の他にも、京都の歴史ある寺社には、古くから語り継がれてきた様々な言い伝えを持ち、それが現在も信仰心として受け継がれているところが数多く残っている。近くのお寺さんの読経の声や木魚の音、ご近所の人々が通りがかりにお参りされるお宮さんの鈴や柏手の音は、現在もなお人々の信仰心が深く生活に根付いていることを感じさせている。



写真2-6 矢田寺

—暮らしに息づくハレとケのまち京都—

(1) 京都の祭礼

京都の人々は、暮らしの中に様々なハレの営みを取り入れることで、ハレとケのめりはりある生活を大切にしてきた。

そのハレの場で最大のものと言っても過言ではないのが、祭礼である。「京都には祭りのない日がない」と言われ、一年を通じて市内各地で祭礼が行われる。そして、その祭礼が京都の人々の生活のよりどころとなっている。

この項では、祇園祭、葵祭、時代祭の京都三大祭や京都五山送り火、京都の奇祭として知られるやすらい祭、鞍馬の火祭などの行事などを中心に、歴史的に積み重ねてきた京都の祭礼により形成された歴史的風致を、一年の流れに沿って示していく。

ア 具体事例

(7) 冬（1月～2月）

a 十日ゑびす（初ゑびす）



図2-10 十日ゑびす（恵美須神社）

十日ゑびすは、1年の商売繁盛と家運隆盛を願う行事で、1月8日～12日、京都市東山区の恵美須神社で行われる祭礼である。

舞台となる恵美須神社は、鎌倉時代、栄西禪師が建仁寺建立にあたって恵美須神を祀ってその鎮守としたのが始まりとされる。室町時代には幸福をもたらす七福神の信仰が成立し、恵美須神社も商売繁盛、家内安全の神として大衆の信仰を集めている。

この十日ゑびすは、福の神「ゑびすさん」の誕生日の1月10日に、福をあやかろうとする

庶民の願いから始まった祭りとして、求めた吉兆に、千両箱や福俵、福をかき集めるという福熊手などの縁起物を飾った参拝客で賑わう。

京都での十日ゑびすの発祥は定かではないが、寛政11年（1799）発行の「都林泉名勝図会」^{みやこりんせん}には、建仁寺門前の十日ゑびす祭としてその様子が示されている。なお、ゑびす信仰の最たる象徴とも言える笹の歴史はさらに長く、現在から約400年程前の慶長年間に考案されたといわれている。

参拝の最後に忘れてはならないのが、念押しのお参りである。耳が御不自由な「ゑびすさん」に声が届くよう、本殿横の板を叩いて注意をひき、もう一度願いを込める。境内は、人々の喧騒とともに笛や太鼓のお囃子が流れ、柏手や参拝者がトントンと板を叩く音が混じりあい、活気に満ちた独特の空気に包まれる。

また、東映太秦映画村の女優さんによる宝恵かごに乗っての社参や福笹の授与、宮川町・祇園町の舞妓さんの奉仕による福笹や福もち授与の行事などもあり、新年を祝う雰囲気や一段と華やかに彩られる。四条通から恵美須神社までの参道には露店がずらりと立ち並び、伝統産業など中小企業の経営者が多い京都の1月の風物詩となっている。参詣する人々は、商売繁盛を祈願しつつ、一年無事に過ごせるを感じている。



写真2-9 十日ゑびす

提供 恵美須神社（京都）

b 節分祭・節分会

2月3日（4日の年も）、市内各寺社で節分行事が行われる。

節分は、春夏秋冬の節目のことであったが、特に新しい年を迎える意味をもつ立春の前日の儀礼は、大晦日に宮中でおこなわれた追儺^{ついな}の

儀礼と結びつき、現在のような豆で鬼を追う形式に変化した。文武天皇の慶雲3年（706）にはすでに行われていたという宮中の追難は、方相氏が発する声と群臣の弓などで難（疫鬼の意味）を追い払うものであった。平安時代末期になると方相氏の仮面や装束が異様であることから、鬼と取り違えられるようになった。節分に豆をまく行事は、京都では室町時代に始まり、「鬼は外」の唱え事も既に行われていた。

節分詣り発祥の社とされる左京区の吉田神社で行われる節分祭は、最も有名な節分行事の一つであり、吉田兼見により記された「兼見卿記」の元龜3年（1572）の記事の中に、記載を見ることができる。室町時代に始まったとされる疫神祭、追難式、火炉祭などの祭事は、現在も古式にのっとり執行され、期間中50万人を超える参拝客で賑わう。

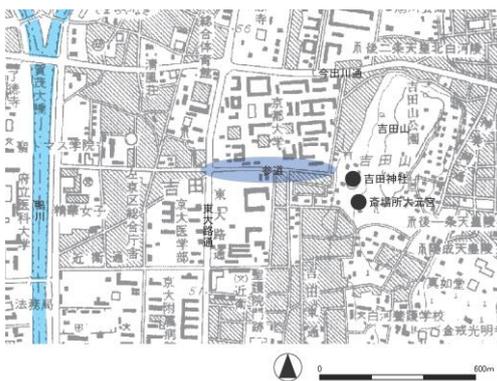


図2-11 節分祭の例（吉田神社）

旧暦の節分に鯛と柊を門口に指し、年男が厄を避け、福よ来いと炒った豆を蒔く風習は江戸初期には一般の家で行われていることが文献に記載されているが、鬼の姿をした鬼を追い払う風習は明治以降であると推測される。

吉田神社は、貞観元年（859年）、藤原山蔭が春日の四神を勧請し、平安京の鎮守神にしたのが起こりで、重要文化財の斎場所太元宮をはじめ、境内には、多くの摂社、末社がある。

2日に執り行われる追難式では、主役の方相氏、赤・青・黄の三鬼、仮士の子供、上卿などが参道を下り始め、やがて方相氏と鬼が戦い、次第に鬼の力が弱くなり、最後に上卿が桃の弓で葦の矢を射って鬼は追い払われる。大変に迫

力のある祭事であり、参拝客の喧騒に交じって、鬼の迫りに恐れられた子供の泣き声が聞こえる。3日の火炉祭では、境内に据え付けた巨大な金網式の炉の中にいれた旧年のお札や神矢などを燃やす火柱があがり、夜を通して燃え続ける。その炎は参拝者に無病息災をもたらし、新春の幸運を授けると言われる。

この、節分祭の期間中、参道には800を超える多くの露店が立ち並ぶ。ここで授かった豆は大切に家に持ち帰り、家族と一緒に、年の数を数えて厄除けを祈念して食する。



写真2-10 節分祭（吉田神社）

提供 吉田神社

(イ) 春（3月～6月）

a やすらい祭

今宮神社等のやすらい祭は、別名「やすらい花」（重要無形民俗文化財）ともいい、地域に根差した民俗行事として、鞍馬の火祭、太秦の

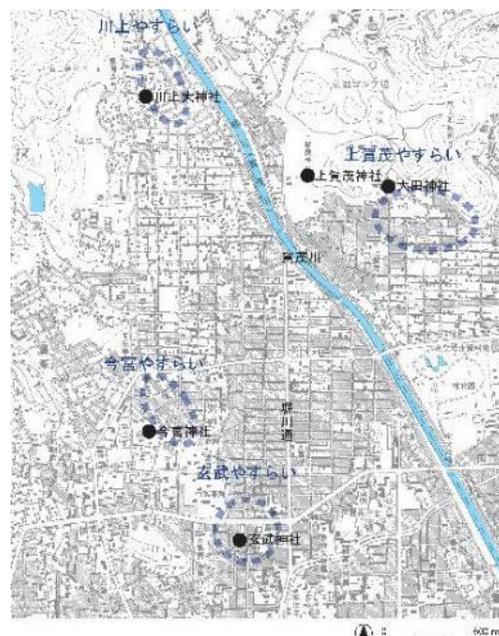


図2-12 やすらい祭

牛祭とともに京都の三大奇祭の一つに数えられている。

今宮神社は、長和4年（1015）洛中に疫病が流行した際、疫神の託宣たくせん そうしにより創祀したと伝えられ、社伝によると、平安後期、桜の散り始める陰暦3月の頃疫病が流行したので、花の霊を鎮め無病息災を祈願したのがやすらい祭の起こりという。鎌倉時代後期に成立したとされる「百練抄」には、仁平4年（1152）の内容に、紫野社（今宮社）の夜須礼やすらいについての記載がある。また、安永9年（1780）発行の「都名所図会」には、当時の祭の様子が描かれている。

毎年4月の第2日曜日に、花傘（上に桜の花を飾り、幔幕まんまくを回した大きな傘）を先頭に、風流の服装をして、鉦かねや太鼓をたたき、踊りながら氏子区域をくまなく練り歩き、最後に神社に参拝し、無病息災を祈願する。囃したり踊ったりするのは、豊かな稲の実りを祈るとともに、疫神を踊りの中にまき込んで鎮めるためといわれている。その疫神は花の精の力によりそのまま神社に封じ込める。

祭の行列は、旗、榊台、唐櫃、鉦、御幣等の後に花傘を先頭に20名ほどの踊の一団が続く。



写真2-11 やすらい祭

世話役のほかにも間鼓（子鬼、複数名）、大鬼（鉦2人、太鼓2人）、囃子方（笛）が続く。現在は、玄武神社、今宮神社、川上大神社、上賀茂の4つのやすらい踊保存会によって伝承される。小学3年生までは「子鬼」、もう少し上の学年になると「囃子方」を担当する。中学、高校生になると「大鬼」になって、鉦や太鼓をたたきながら踊る。保存会では、こうした子供た

ちの先輩が、踊りや囃子の手ほどきを行い、代々、伝承してきた。

この行列は、朝から夕方まで練り歩く途中で、概ね50メートル間隔でオレンジ色の布を軒先に垂らした家の前で止まって踊りを披露する。その家は、氏神に何らかの貢献をしている家である。このときには、皆が競って花傘の中に入って、悪霊退散と無病息災を祈願する。とりわけ、生まれて初めてこの祭りを迎える赤ん坊は、花傘の中に入ると一生、健やかに過ごせるとされている。このため、この日は、外孫も、内孫も全員集合して、町内はいっそう祭に盛り上がる。さらに、町内ごとに休憩所しょうぎ（床几）が設けられ、歩き疲れ、踊り疲れた踊りの一団の労をねぎらう。

b 葵祭

葵祭は、かつて勅使（天皇の使者）が派遣された由緒ある祭で、数少ない王朝風俗の伝統が現在も受け継がれており、わが国で最も優雅で古趣に富んだ祭として知られている。また、長い歴史の中で、幾度か行列の実施が中断していた時期もあったが、その間も社家の人々が、社頭の儀などの神社内の祭を変わることなく大切に脈々と守り続けている伝統行事である。

(a) 祭の歴史

葵祭は、平安京ができる遙か以前、風水害で作物ができなかったときに、鈴をつけた馬を走らせ、五穀豊穡を祈ったのが始まりとされ、平安時代以降、国家的な行事として行われてきた賀茂社の祭であり、毎年5月に行われる約1ヵ月間の祭礼行事のうちの一日が葵祭である。源氏物語の中で描かれる車争いのシーンは、この祭の歴史を物語っている。

その呼び名は、祭に関わる人や牛車などに葵の葉をつけたことに由来し、元禄年間（1688～1704）の再興以後、葵祭と呼称されるようになった。

また、賀茂社は、賀茂別雷かもわけいかづち神社（通称、上賀茂神社）と賀茂御祖神社（通称、下鴨神社）をあわせた呼称で、賀茂社の名が文献上に初見するのは「続日本紀」文武天皇2年（698）3月辛巳条で「山城の国の賀茂祭の日

に衆の会して騎射するを禁ず」と記している。社殿は天武天皇6年（677）に初めて社殿を造営と記されている。

天平元年（729）頃までの文献にみえる賀茂社は上賀茂神社をさし、下鴨神社の成立は天平勝宝2年（750）頃。

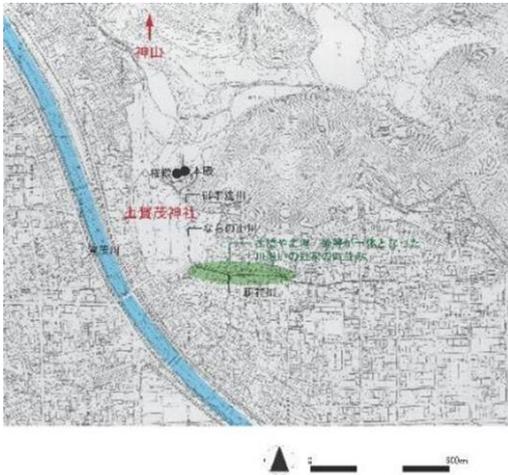


図2-13 上賀茂神社

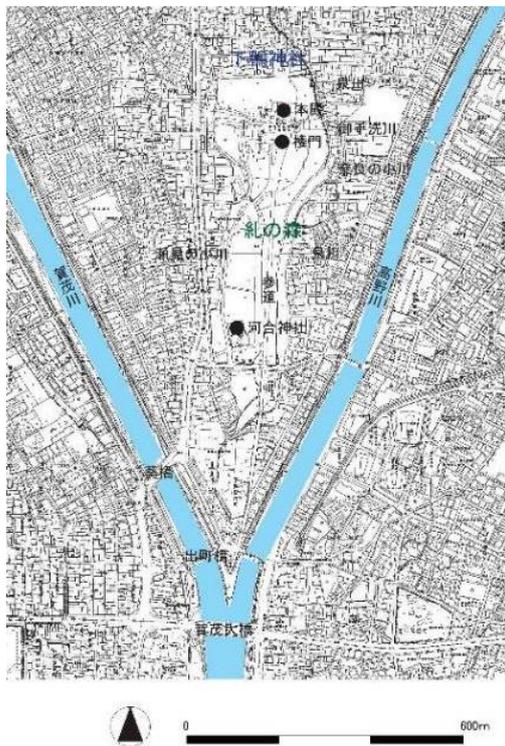


図2-14 下鴨神社

(b) 葵祭と一連の祭事

葵祭に先駆けて、上賀茂神社（賀茂別雷神社）では、競馬会神事（賀茂競馬、市登録無形民俗文化財）や、祭祀の中でも最も古く荘厳な神事である御霊迎への神事、御阿礼神事

などが行われる。また、下鴨神社（賀茂御祖神社、国宝他）でも、神霊迎への神事である御蔭祭が行われる他、両社が隔年交代で行う斎王代御禊など、葵祭を中心とした賀茂祭の行事が多数執り行われる。

競馬会神事は、寛治7年（1093）の5月5日の節句に催されていた宮中武徳殿の式を上賀茂神社に移し奉納されたことに由来する、天下泰平・五穀豊穰を祈願する神事である。

御霊迎への神事は、御蔭神社から葵祭の神霊を迎える神事で、社伝では人皇第二代綏靖天皇の3年に始まった、わが国最古の神幸列といわれる。室町後期に中断したが、元禄年間（1688～1704）葵祭とともに復興した。

御阿礼神事は、上賀茂神社の神事で、当社最古の神事といわれる。

葵祭の祭儀は、宮中の儀、路頭の儀、社頭の儀の三つからなるが、現在は路頭の儀と社頭の儀が行われている。

路頭の儀は、5つのグループから構成された総勢512名（馬36頭、牛4頭、牛車2台、腰輿1基）、約700メートルの行列である。

それぞれに平安時代の装束に身をかため勅使・斎王代を警固しながら、午前10時半に京都御所の建礼門前を出発する。

京都御所を出発した行列は、丸太町通、河原町通を通り、下鴨神社に到着、その後、下鴨本通や北大路通、北大路橋、賀茂川堤を通り、午後3時30分に上賀茂神社に到着する。その間、約8kmの道のりとなる。

華やかに飾った牛の背に付けた鈴の音とともに、ギンギンとなる牛車や十二単の斎王代の登場に沿道の観衆の歓声上がる。

斎王代とは、鎌倉時代まで続いた賀茂社の斎王を模した役割で、毎年、未婚の女性を一般から募集している。もともと、斎王は皇族の未婚の女性から選ばれる習慣で、天武天皇の時代に制度化した伊勢神宮の斎王（通称、斎宮）の制にならって、弘仁年間（810～824）から賀茂社でも斎王（通称、斎院）

の制を定めたとされる。賀茂祭の奉仕は、齋王の重要な役割であった。

行列が上賀茂神社・下鴨神社の両社に到着すると、それぞれ社頭の儀が行われ、勅使が御祭文を奏上し、御幣物を奉納する。さらに平安朝をしのばせる雅な雰囲気あずまあそびのなかで、神馬の引き回し、舞人による「東游（東遊）」の舞が奉納される。



写真2-12 路頭の儀

(c) 祭礼をとりまく空間

祭礼の場となる賀茂社は、上賀茂神社と下鴨神社の2社からなる。両社は元々、京都盆地北部の豪族、賀茂かもの郡主一族の氏神であった。

両社はともに広大な森に包まれ、祭ごとに神体山から祭神を迎える神迎えが行われるなど、社殿創立以前の古代信仰・自然信仰が現在まで色濃く残っている。

上賀茂神社は、今日でも厄除、方除、必勝ほうよけの神として信仰を集めている。本殿・権殿は共に流造の典型として国宝に指定され、他の34棟は重要文化財である。

既に奈良時代初期の山城国風土記に見えており、社殿の創建は天武7年（678）と伝える。現在の社殿は、本殿・権殿が文久3年（1863）、その他の社殿は寛永5年（1628）造替されたものである。

下鴨神社も、平安期以前の創祀である。京都最古の社の一つで山城国一の宮と崇められ、国事を祈願し、国民の平安を祈る神社として「賀茂齋院の制」「式年遷宮の制」等が定められた。欽明天皇5年（544）から賀

※1 神賑の風流

平安遷都以来、時期によってその都市域を伸縮させてきた京都であるが、おおよその都心域に住まう人々の氏神は、今宮、北野、上御霊、祇園、伏見稲荷、松尾、藤森といった郊外に鎮座する神々であった。社は郊外に鎮座するものの、祭りの際には、神は輿に乗り氏子の間を巡り、氏子の居住地内のお旅所に滞在する。神輿が滞する御旅所での祭事が祭礼の中核となるのは全国共通のことであるが、京都においては神輿を迎え、あるいは送る際の神賑の風流が早くから発達した。それは都市ゆえ、不特定多数の人々の視線に応えようとした結果であり、豊かな祭礼文化を生むに至るのである。



図2-15 氏子域

茂祭が行われていたという伝承がある。国史跡「賀茂御祖神社境内」の広大な境内には、本殿（国宝）2棟や53棟の重要文化財社殿が並ぶ。建立は、本殿が文久3年（1863）

（江戸後期）、その他の社殿寛永5年（1628）（江戸前期）である。

上賀茂神社、下鴨神社は、ともに平成6年（1994年）、「古都京都の文化財」として、「世界遺産条約」に基づく世界文化遺産に登録された。

上賀茂地区の町並みは、上賀茂神社を中心に、社家と氏子によって門前集落が形成され、室町時代から神官の屋敷町として発展してきた。今日でも神社から流れ出る明神川に沿って、社家の屋敷が連なり、明神川に架かる土橋、川沿いの土堀、門、土堀越の緑と一体となって、江戸時代にできた社家町の歴史的景観を伝えている。



写真2-13 社家の町並み



写真2-14 賀茂別雷神社（上賀茂神社）



写真2-15 賀茂御祖神社（下鴨神社）
提供 下鴨神社

(d) 祭を支える人々

葵祭は、上賀茂・下鴨神社の社家をはじめ、旧公家の堂上会、平安雅楽会の人々など、様々な関係者の協力によって、装束、衣紋、化粧などが古式のままで今日まで引き継がれてきた。その努力は並大抵のものではない。また、一般の人々も参役者などで祭に参加するなど多くの人々の支えによって、葵祭は継続されている。

行列を整然と導くのは、後醍醐天皇の時代から朝廷の重要な儀式に奉仕してきた八瀬童子会である。京都北部に位置する八瀬地域は昔から御所との関係が深く、小学校6年生の男子が地域の人々とともに祭に参加し、近

衛遣・蔵遣・山城遣を務める「八瀬童子」として現在も受け継がれている。

また、祭の用具の手入れ、新調などにより、それらの伝統工芸を扱う若い担い手づくりに役立っている。華やかな祭の継続は、伝統技能の継承に大きな役割を果たしているのである。

(ウ) 夏（7月～8月）

a 祇園祭

京都において神賑^{かみにぎわい}の風流※1は、都市祭礼の華といわれる祇園祭の山鉾とその行事に端的に見ることができる。

中でも、祭のハイライトである山鉾巡行は、動く美術館とも称される豪華絢爛な山鉾（重要有形民俗文化財）の姿が多くの人々を魅了し、長い伝統を継承してきた京都の「町衆」の心意気を伝えている。

(a) 祭の歴史

毎年7月に行われる祇園祭は、古くは祇園御霊会（祇園会）といわれ、平安時代より続く東山区祇園町の八坂神社（重要文化財：本殿、楼門他）の祭礼であり、その歴史の長さやその豪華さ、祭事が1ヶ月の長きにわたるものであることで広く知られている。

祭の起源は、貞観11年（869）にさかのぼる。その年、疫病が流行し、卜部日良麻呂が勅を奉じ、神泉苑^{しんせんえん}に66本の鉾を立て、祇園社の神輿^{みこし}を送って御霊会を行ったといわれる。その後、八坂の地に牛頭天王^{ごずてんのう}を祀る祠堂が整備され、安和3年（970）からは、祇園御霊会は毎年恒例の行事となった。南北朝時代に入ると、京都の町衆による風流として山鉾巡行が加わり、華やかさは一層増していった。応仁の乱で山鉾巡行は途絶えたが、明応9年（1500年）に再興された。以後、中国やペルシャ、ベルギーなどからもたらされたタペストリーなどが各山鉾に懸装品として飾られるようになった。江戸時代に入っても大火に見舞われたが、その都度、町衆の力によって再興され今日まで祭の伝統が守られている。なお、安永9年（1780）に発行された「都名所図会」には、山鉾の様子

が描かれている。現在、巡行に参加している山鉾は32基であり、各町毎に山鉾保存会が組織され、維持管理や祭の運営に携わっている。このうち、29基が重要有形民俗文化財に指定されている。一般に山鉾は、その形態から鉾、かきやま 昇山、ひきやま 曳山、屋台、傘鉾の5つの型に分類できるが、祇園祭ではこの5つ全ての型が登場する点が特徴である。

江戸時代には、山鉾町の多くは町家ちょういえという町会所と土蔵（山鉾の収蔵庫）を持つようになり、現在でも多くの山鉾町で町家が維持され、使用されている。

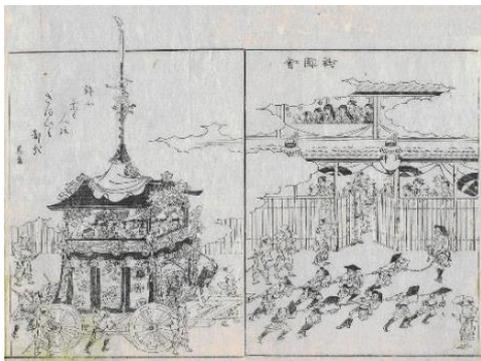


図2-16 都名所図会（祇園会）

国際日本文化研究センター 所蔵

(b) 祇園祭の一箇月

一箇月もの間、祭の舞台となるのは、人々の信仰の深い八坂神社や御旅所を中心に、京都の伝統的な自治組織「町組」のコミュニティの場である「町会所」、京町家などの歴史的建造物群、そしてこれらの建造物群が構成する京都の歴史的な町並みである。

祇園祭は7月1日の「吉符入」から始まる。

これは神事始めの意で、各山鉾町ではそれぞれの町会所に八坂の大神をお迎えし、その年の神事以下役員の選定を行うほか、山鉾の組み立てや曳行に当たる大工手伝えいこうい並びに車方の人びとと打合せを行う。その後、山鉾各町からの招きを受けた八坂神社の神職が、山鉾各町の会所に出向き、お祓いを行う。

2日には、京都市役所でくじ取り式が行われ、「くじ取らず」を除いた山鉾の巡行の順番が決まる。

10日頃になると、巡行の山鉾が収蔵庫から出されて組み建てが始まる。この作業が始まると、一気に祭ムードが高まる。

13日には、ながなたぼこ長刀鉾の稚児社参が行われる。これは、長刀鉾にのる稚児が、午前11時、たてえぼしすいかん立烏帽子水干姿で八坂神社に詣でるもので、俗にお位もらいともいい、多くの見物客で賑わう。

14日から16日までは宵山である。

各山鉾町では、駒形提灯に灯がとり、祇園囃子がにぎやかに奏でられ、その音色と、厄除けとされる粽やお守り、ろうそくなどを売る子供たちの「ちまきどうですか〜」といったわらべ歌の響きとがあいまって、宵山情緒を盛り上げている。

そして、17日には、祭りのハイライトである山鉾巡行が行われる。

巡行は午前9時、四条烏丸から長刀鉾を先頭に河原町通を経て御池通へ向う。途中、「注連縄切り」「くじ改め」や、豪快な「辻廻し」などで見せ場を作り、豪華絢爛な一大ページェントが繰り広げられる。

巡行する山鉾は、疫神を集めるための装置であるといわれる。そのため、神の耳を楽しませる歌舞音曲、目を楽しませる豪華な懸装品によって荘厳な姿とされる必要があった。これは祭りを見物する人たちを驚かせるとともに、祭りに参加する人々の誇りともなったのである。

一方、八坂神社では、7月10日の神輿洗式、御神霊を移す15日の宵宮祭の後、17日の夕刻に氏子域を巡行する神幸祭しんこうさいが行われる。

午後4時からなかござ ひがしござの神事後、中御座、東御座、にしござ西御座の3基が八坂神社を出発する。八坂神社の石段下では、朱色の映える西楼門を背に、神輿がそれぞれ差し上げを披露する。神輿は「ホイットホイット」という早き手の掛け声と飾り金具を響かせ、氏子域を巡行し、夜遅くに四条寺町の御旅所へ到着、奉安される。

24日の還幸祭で氏子域を巡行して八坂神社に戻り御神霊を八坂神社に還し、28日の神輿洗式の後、神輿は神輿庫に収められる。

保存会の役員たちは、7月の1箇月間は、麻のかみしも袴を身にまとい、祭の準備に走り回る。そして、京町家は通りと一体となって祭の舞

台となり、主人や家族、そこに訪れるお客さんや通りがかりの人々などが参加し、ハレの日を演出する。

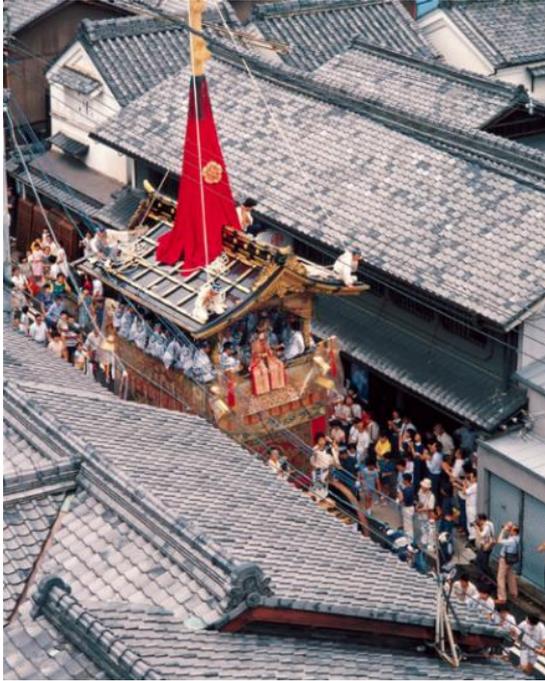


写真2-16 新町通りを通る月鉾

出典 「京町家の再生」*

* (財)京都市景観・まちづくりセンター編, 写真撮影:水野克比古・水古・水野歌夕(以上 水野克比古写真事務所)以下本文中におけるについて同じ。

(c) 技術の伝承

山鉾は、「縄がらみ」といわれる祇園祭の歴史のなかで現在まで受け継がれてきた伝統的な技法で、一本の釘も使わずに荒縄のみを使い、しっかりと固定しながら組み立てられる。高さ20数メートル、重さ10トン以上もの山鉾を動かしたときの衝撃や鉾の歪みをうまく吸収しているといわれ、熟練の大工方は、結び目の美しさにもこだわり、「祇園祭の美」を支えている。

また、山鉾は巡行終了とともに解体される。これは、鉾に吸い寄せられた疫神を解体することによって遷却せんきやくするためであり、山鉾は毎年組み立てと解体を繰り返してきた。

こうした山鉾に関わる様々な技能も祭りとともに受け継がれている。

山鉾本体を組み立てる手伝い方と大工方には始まり、車輪の横に付き添い、カブラと呼ばれる楔で車輪の方向調整を行う「車方」、鉾の屋根の上に乗る、巡行路の障害物と鉾と

の接触を防ぐ「屋根方」、鉾の舞台に乗り、お囃子を演奏する「囃方」、鉾の前部に立ち、車方や曳き手の動きを統括する「音頭取り」、山鉾を動かす「曳き手」「昇き手かきて」である。大工方などは専門の技能を必要とするため、代々、町内に入出入りしている大工・工務店が主要な担い手となっている。



写真2-17 山鉾の組み立て

出典 「京町家の再生」

(d) 町会所と屏風祭

町会所は、町衆自治の伝統を継承し、育んできた町の核と言える。今日もなお、祭の当日はもとより、平時から囃子方の練習等、地域の寄り合いに利用されるだけでなく、事務所や店舗に貸し出して祭の管理運営の原資を得ている重要な施設である。会所の中には、市指定文化財として4件の会所ゆいだなちようかいしよ たかなちようかいしよ (小結 棚 町会所、箒 町会所、天神山町会所、燈籠町会所) などがある。

祭の期間中、町会所では「会所飾り」が行われ、山鉾を飾る人形・織物・装飾金具などが美しく飾られる。山鉾町は、和装関連の間屋の集積する室町通、新町通などの界隈にあることから、裂類きれの装飾品が充実している。近世以前までの裂類の装飾品は1000点余に及び、そのうちの3割が海外からの渡来品である。これらの多くはもともと敷物やタペストリーとして利用された大型の織物であるが、中には世界で唯一残った絨毯もあり、年に1回、祇園祭の掛け物としてしか利用されなかったことから、大変保存状態が良いものが多い。

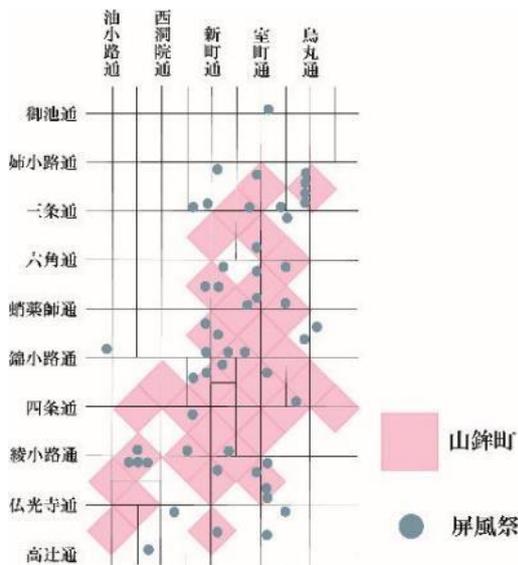


図2-17 屏風祭分布図

また、「会所飾り」に呼応するように、自宅や会社の京町家などでも「屏風祭」が行われる。京町家の表の格子をはずして幔幕を張り巡らせ、店から奥座敷まで障子襖類を取り払い、涼しげな御簾をかけるなど、祭りの際の座敷として「ハレ」のしつらえに整えられる。そして、床に毛氈などを敷きつめた上に、その家の秘蔵の屏風などの美術品を公開する。特に「宵山」の夜には、表通りから家の中までよく見通せ、それらの美術品を拝見し、



写真2-18 屏風祭（小島家）出典 「京町家の再生」



写真2-19 会所飾り（八幡山町会所）

山鉾を愛でながらそぞろ歩くことは市民の楽しみであり、また主人の喜びでもある。その間、町内の家々では、お客様をお招きして宴が催される。表通りは、数十もの提灯に照らされた山鉾、ずらりと並んだ屋台、行きかう人の波で町中が華やかな雰囲気包まれる。

祇園祭に向けて行われるお囃子の練習の音、山鉾の組立て、宵山を経て17日の山鉾巡行、その間に行われる町内での会所飾り、屏風祭など、7月の一ヶ月間にわたる祇園祭の様々な営みが行われ、まちを祇園祭一色に染める。

b 京都五山送り火

毎年8月16日の夜8時に、東山は大文字山（如意ヶ嶽）の中腹にぼつりと一つの明かりが点灯され、見る間に巨大な「大」の字にしつらえられた火床に点火される。続いて、市内を囲む北山、西山の中腹に「妙・法」の文字、「船形」「左大文字」「鳥居形」が次々と点火される。

これらは、総称して「京都五山送り火」と呼ばれ、それぞれが京都市無形民俗文化財に登録されている。8月のお盆に個々の家で迎えた精霊（先祖）を再び冥府に送り返す伝統行事である。その壮大で幻想的な行事は、市民にとって大切な夏の行事であり、京都の夏の夜空を彩る風物詩となっている。

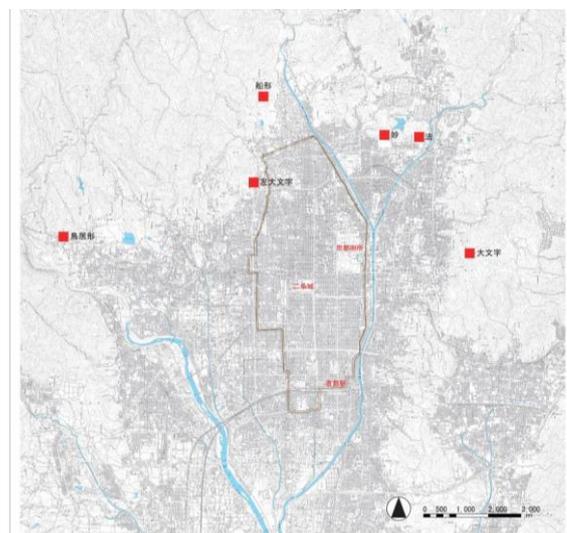


図2-18 京都五山送り火 市街地と送り火との関係

五山送り火のはじまりは明らかではないが、一説には、室町時代後期、当時、盛んに行われた万灯会が、次第に山腹に点火され、盂蘭盆会の大規模な精霊送りの火となったのが起源といわれており、洛外の村々が洛中に向けて行った宗教行事ともいえる。文献に登場するのは慶長8年（1603）の公家の日記で、お盆に鴨河原から山で焼かれた大文字や妙法の灯を見物したと書かれている。現在、点火の儀式や薪の管理などは、各山麓の町の人々が保存会を結成して維持している。

「大文字送り火」は、銀閣寺近辺の旧浄土寺村の人々が大文字保存会を組織し、維持している。

銀閣寺は正しくは慈照寺じしやうじといい、その通称は観音堂の別称「銀閣」に由来する。文明14年（1482）、戦乱で荒廃した浄土寺跡に、足利義政が東山山荘を造営したことはじまる。翌15年に常御所つねのごしよが完成し、後土御門天皇より「東山殿」の名を賜り、その後、銀閣（観音堂）は長享3年（1489）に上棟した。

大文字保存会では、銀閣寺（慈照寺銀閣他：国宝）山門の前で、一般市民から、先祖の供養や現存する人々の利益を願う護摩木を受け付け、集められた護摩木は、送り火の点火材料として山上にある火床へ上げられる。大の字の中心に位置する火床である金尾かなわに隣接する弘法大師堂に灯明がともされた後、大文字寺と呼ばれる麓の浄土院の住職と保存会員によって般若心経が唱えられる。午後8時になると、竹に麦わらを結びつけ、松葉を先につけた松明に灯明の火を金尾にある親火をうつし、大の字の中心に点火された後、合図によって一斉に点火される。

「松ヶ崎妙法送り火」は、松ヶ崎妙法保存会によって維持されており、日蓮宗（法華宗）の信仰に厚い地域であることと密接に関係する行事である。点火の際、「妙・法」の山では、松ヶ崎堀町にある涌泉寺ゆうせんじ（市指定登録有形文化財（建造物））の住職や松ヶ崎立正会会長らが読経し、祖霊そらいを送る。

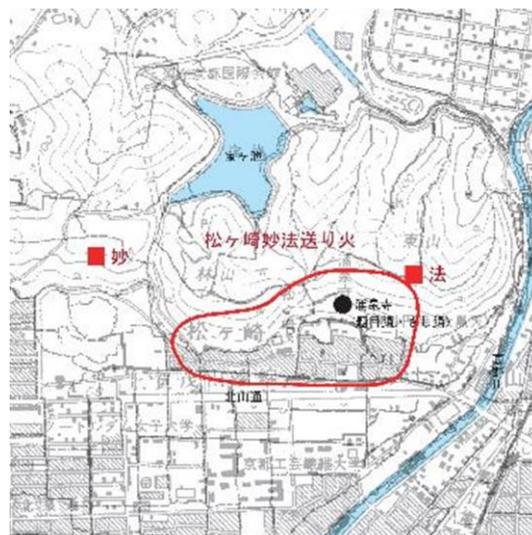


図2-19 松ヶ崎妙法送り火



図2-20 大文字送り火



図2-21 左大文字送り火



図2-22 船形万燈籠送り火

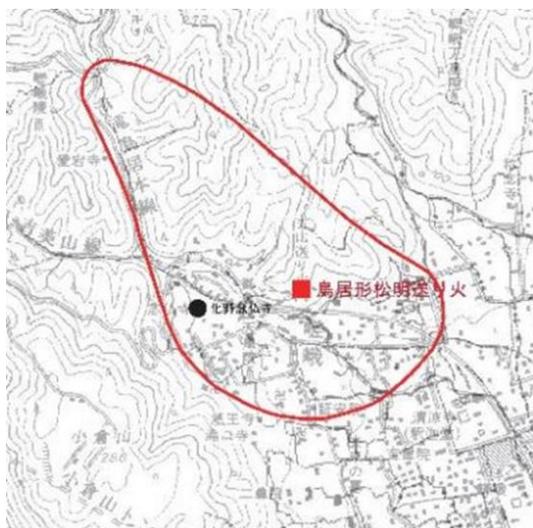


図2-23 鳥居形松明送り火

涌泉寺は、大正7年（1932）、現在地にあった本涌寺と付近の妙泉寺が合併し、両寺より一字ずつ取り現寺号を定めた。妙泉寺は正暦3年（992）中納言保光が創建した天台宗松崎寺に始まり、本涌寺は天正2年（1574）、教蔵院日生が創建した日蓮宗の壇林で、松ヶ崎壇林が通称である。

涌泉寺では、送り火が消えた午後9時ごろから境内で題目踊（市登録無形民俗文化財）が催される。この題目踊は、寺伝では永仁2年（1294）日像に帰依して天台宗から改宗した住職実眼が、徳治2年（1307）村民の改宗を喜び、太鼓を打って法華題目を唱えたと村民も唱和して踊ったのが始まりといわれ、元禄17年（1704）に発行された「花洛細見図」には、題目踊の様子が描かれている。現在は、輪になった男女が音頭取りの太鼓の合図で「南無妙法蓮華経」という題目に節をつけて繰り返しながら踊るもので、送り火前日の夜にも行われる。また、題目踊の後には、近世になって流行った盆踊りであるさし踊（市登録無形民俗文化財）が踊られる。

「船形万燈籠送り火」は、麓にある西方寺（浄土宗）と船形万燈籠保存会が中心になって維持している。「大文字送り火」同様に、西方寺で護摩木の受け付けを行っており、当日は午後8時15分に点火され、その後、境内では六斎念仏（国指定重要無形民俗文化財）が行われる。



写真2-20 大文字送り火



写真2-21 松ヶ崎妙法送り火



写真2-22 船形万燈籠送り火



写真2-23 左大文字送り火

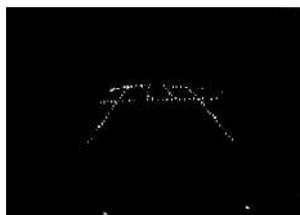


写真2-24 鳥居形松明送り火

西方寺は、承和14年（847）円仁の創建と伝えられ、正和年間（1312～17）道空法如が中興して天台宗から浄土宗に改めた。

六齋念仏は、鉦や太鼓を打って囃し、念仏を唱えながら踊る民俗芸能である。平安中期、空也が民衆教化のため始めたとされる踊り念仏が、中世以降芸能化したもので、もとは六齋日（毎月8・14・15・23・29・30日）に行った。

西方寺の六齋念仏は、左京区にある干菜山光福寺（通称、干菜寺）の六齋念仏の系統で、本来の踊り念仏の型を比較的保っているといわれている。

「左大文字送り火」は、左大文字保存会によって行事が維持されている。鹿苑寺（金閣寺）境内で護摩木の受け付けを行っている。

鹿苑寺の前身は、応永4年（1397）、足利義満が西園寺家の山荘を譲り受けて造営した北山殿である。義満没後、夢想疎石を追請開山とし、寺号は義満の法号による。

当日は北区衣笠街道町にある法音寺（浄土宗）の本堂の灯明の火によって、当寺にある親火台への点火が行われる。一方、会員のうち、若手を中心に薪や護摩木は山上に上げられる。暗くなる頃には法音寺住職の読経があり、大松明に親火から火が移される。午後7時にはこの大松明を中心に行列を作り、火床を目指す。

「鳥居形松明送り火」は、松明で燃やしているため、保存会の名も鳥居形松明保存会と称している。護摩木の受付は、近年になって化野念仏寺で行われるようになった。

化野念仏寺は、古来、京の葬送地であった化野に葬られた人々の菩提を弔うため、空海が弘仁年間（810～24）に開創した。五智如来寺と号し、真言宗に属したが、中世に法然が念仏道場を開いてから念仏寺と改称し、浄土宗に転宗した。

受付られた護摩木は、化野念仏寺において供養された後、山上へと運ばれ、点火される。この送り火は、他とは異なり、親火より火を移した松明を持って一斉に走り、各火床に突き立てる。そのため鳥居の柱に当たる火床は縦の走りおよび、ベテランが担当し、笠木と貫の部分

は横の走りといい、若い人が担当する。

五山の送り火の火が消えると、火床に残った送り火の燃えさしを和紙で巻き、水引をかけて玄関先につるし、厄病除け、魔除けになると伝えられ、この風習は現在も受け継がれている。

燃えさしの起こりは不明であるが、江戸時代に飢饉や火事などで大文字の点火が危ぶまれた時、中京区の鳩居堂の主人から援助があつて、どうにか点火できたということがあり、その返礼として燃えさしが贈られたという話が伝わっている。

このように、五山の送り火は、洛外の村々も、京都の文化と深く関わりをもち、それぞれの地域の歴史や伝統等を反映したお盆の信仰行事が、市民生活の中で現在も受け継がれ、信仰行事と、その舞台となる寺院等とが一体となり、趣ある風情を形成している。



写真2-25 火床（左大文字）

京都の家々では、点火の時間が近づくと、照明を落とし、家の物干し場やベランダ、あるいは河川敷や橋の上などに出かけていく。このときには、近在あるいは遠方からも親戚縁者が集い、宴を喜び、冥府に帰る祖先を偲ぶ。夜の暗さの中に、五山の灯が赤々と灯ると見物の人々の間から静かなどよめきが湧き上がる。京都の町全体をしめやかに彩る五山の送り火で、京都中の精霊を一斉に冥府に送ると、夏は終わり、町はにわかに秋めく。



写真2-26 準備風景



写真2-27 送り火の日の玄関

(イ) 秋 (9月～11月)

a 時代祭

明治28年(1895), 平安遷都1100年を記念して平安神宮が創建された。その時、平安神宮の大祭、建造物、神苑の保存のため、市民により平安講社が組織され、記念行事として時代祭が始まった。今日の市民祭の先駆けである。祭が行われる10月22日は、桓武天皇が平安京に都を移した日であり、いわば、京都の誕生日である。その日に行われる時代祭に「目で京の都の歴史と文化が理解できるものを」「京都をおいて他にはまねのできないものを」という市民の心意気を感じる。

(a) 祭の概要

祭の場となる平安神宮は、平安京遷都千百年記念祭の一環として、岡崎で開催されることになった第4回内国勸業博覧会の会場に計画された。神号を平安神宮、社格を官幣大社と位置付けられることになり、桓武天皇の神霊が遷され祀られることになった。その後、幕末の孝明天皇も合祀され、今日に至っている。

この祭りの特色は、神幸祭、還幸祭などの神儀のほかに、時代祭風俗行列(市登録無形

民俗文化財)が行われることである。明治維新から遡り、延暦時代まで、順次、風俗、文物の変遷をきわめて忠実に再現する。平成19年より、天皇に謀反を起こした政権ということで行列に入っていなかった室町時代の2つの行列が加わり、20列、2000人、長さ2kmの行列となった。調度、衣装、祭具は1万2千点に及び、綿密な時代考証が重ねられ、京都が1千年の間、都として培ってきた伝統工芸の粋を集めて復元されたものである。まさにその時代にタイムスリップしたような、生きた時代絵巻が繰り広げられる。

行列は正午に京都御苑を出発し、烏丸通、御池通、三条通、神宮道を経て、平安神宮(市指定文化財・国登録有形文化財)へ向かう。



写真2-28 時代祭 風俗行列1



写真2-29 時代祭 風俗行列2

(b) 祭の運営・平安講社

この壮大な祭事を運営しているのが、市民の組織、平安講社である。

平安講社は、平安神宮と神苑、さらには時代祭の維持や崇敬者の組織化を目指して平安京遷都千百年記念祭協賛会の幹事会が設立を提案し、明治28年（1895）に発足した。当初は、市民が1日1厘の賽銭を奉納する提案であった。講社の組織は、当時の京都の行政区分に従い上京区、下京区、愛宕郡、葛野郡の4地区を6「社」に区分し、各社がそれぞれの行列を担当することとした。

その後、市域の拡大に伴い平安講社も大きくなり、今日では10社から成る。そして各社は、概ね20前後の元学区を単位とする「組」からなり、各組が輪番でその年の行列を担当する。したがって、各元学区は、概ね20年に一度、大役が回ってくることになる。その役が回ってくると、元学区では、当該年度の行列にかかる費用の一切を負担する必要がある。このため、多くの元学区では、20年に一度の経費を確保するため、元学区全体で古紙回収に取り組む。このことから、時代祭は京都市民の日常に深く意識された市民祭といえることができる。

さて、当番の前年には、時代祭の実行委員会が学区に設けられ、当番に当たっている学区の様子を逐一、見学することにより翌年の行事内容を確認していくのである。その結果を踏まえて、役員体制と業務内容を確定し、当番に備える。

各社には、専属の「お祭り屋」が存在する。彼らは、その社の装束、用具の一切を維持修理などを含めて管理する。行列に必要な馬や学生ボランティア、「奴」など特殊な技能を持つ人を手配し、装束に慣れていない人には着付けも教える。平安神宮からの帰りのバスや弁当などの手配も行う。彼らの存在なしには、時代祭は運営できないほど大切な存在である。多くは世襲のように代々、その業務を引き継いでいる。

さて、当番の年である。自治連合会会長が運営委員長となり、女性会等、各種団体の役員が運営委員となり、当日の進行表と役割分担表を作成する。この際にも、「お祭り屋」の指導と手伝いが欠かせない。そして、何度

もリハーサルを繰り返す。その時に会場となるのは、学校である。

そして、祭の1週間前、各学区の代表者は平安神宮に集まり、行列の無事を神前に祈願する時代祭宣状祭を営む。祭儀終了後に宮司から行列への参役の任命書にあたる宣状が授与される。その夜、地元の学校に行列に参役する運営委員が集まり、着付けのリハーサルを行う。「お祭り屋」のメンバーが手分けをして、手際よく草鞋、傘、脚絆、手甲、袴、刀などの着付けを教えていく。前日に、もう一度リハーサルをし、祭の当日には到着付けを行い、学区に集合する。

当日、学校は大変な賑わいとなる。朝から、百名を超える学生ボランティアが集合し、女性会のメンバーが中心となって、次々と着付けをしていく。そうこうしているうちに、馬も集合する。運動場で祭の行進のリハーサルをした後、学区内を練り歩き、祭に支援をした学区民にお披露目をする。そこから、京都御所の集合場所に集まり、行列のスタートに備える。

各社が担当する行列は10列であり、残りの10列は、京都青年会議所、五花街のお茶屋組合、京都料飲組合、大原農協婦人会、白川女風俗保存会など、ゆかりの団体が担当する。



写真2-30 学校での準備

b 鞍馬の火祭



図2-24 鞍馬の火祭

鞍馬の火祭は、鞍馬の由岐神社（重要文化財）において毎年10月に行われる祭礼で、平安末期、祭神を京都御所から鞍馬の里に迎えた時の、村人がかがり火を焚いて迎えた故事によるとされており、市の無形民俗文化財に登録されている。また、江戸時代の様子が、宝暦4年（1814）の「鞍馬村神事元旧記」に詳しく記載されており、当時の神事の模様がうかがえる。

由岐神社は、社伝では天慶3年（940）、王城の北方鎮護のため宮中より勸請かんじょうしたといわれ、国家の非常時、天皇の病気の時、社前に鞍ゆきを奉納したため鞍神社と呼ばれたという。

鞍馬寺は、寺伝では、宝亀元年（770）鑑真の門弟鑑禎がんでいが、靈夢に感じて毘沙門天を安置したのに始まり、延暦15年（769）桓武天皇の勅をうけ、藤原伊勢人が伽藍を造営、北方鎮護の道場としたという。寛平年間（889～98）法相宗から真言宗へ転じ、天永年間（1110～1113）には天台宗となった。

昭和22年（1947）、天台宗から分離独立して鞍馬弘教を立教開宗し、2年後その総本山となった。

火祭の準備は何ヶ月も前から始められる。宮司・役員等による打ち合わせも早くから回を重ねて行われ、祭が支障なく進行すべく、綿密な

計画が立てられていく。

祭も目前となると、各家では格子をはずし、丁寧に清掃する。屋根・壁等の傷みも祭の日に合わせて修理されるなど、鞍馬の人々の、祭を大切にしている思いが偲ばれる。

祭の当日は、夕方になると各家の門口にかがり火が焚かれ、午後6時から子供の手松明が町を練り、やがて武者わらじを履いた里人たちが大松明を担いで、「サイレイ、サイリョウ」の掛け声とともに町内を練り由岐神社に集まる。その火の中を2基の神輿が渡御し壮観を極める。

火祭における各行事は、組仲間ごとに、あるいは地区ごとに遂行される。そこから人々の、組仲間のまとまりや地区のまとまりが生まれ、さらにこれらのまとまりを通して、鞍馬全体の連帯感が生まれ、コミュニティが形成されてきた。

そして火祭の中心的舞台である鞍馬寺の山門前と由岐神社の御旅所はこうしたコミュニティの場となっている。

祭りの当日の夕暮れ時から夜に向かう中、かがり火が町を照らし、幻想的な雰囲気醸し出している。



写真2-31 鞍馬の火祭

(オ) 冬（12月）

a おけらまいり

おけらまいり（市指定無形民俗文化財）は、12月31日の大晦日から1月1日の元旦にかけて、東山区祇園町の八坂神社（国指定重要文化財）で「おけら火」をいただいて家に持ち帰る行事で、広く市民に親しまれ、京都の大晦日を代表する風物詩である。その起源は定かだ

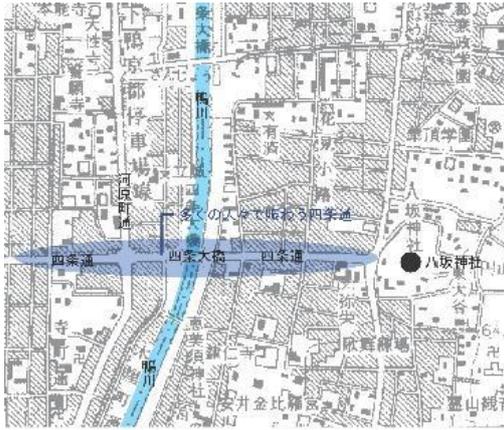


図2-25 おけらまいり

はないが、「拾遺 都名所図会」の中に、祇園削掛しゅういみやこめいしよずえ 神事かかけのしんじとして詳細が記載されている。

おけらはキク科の多年生草本で、その根茎こんけいを乾燥させ外皮を取り除いたものは白朮おけらといい、生薬しょうやくとして健胃薬とそや屠蘇とそに使用される。

おけらは、焼くと強い匂いを発することから、魔除けとして、年頭の招福除災の行事に使用され、そのおけらをまぜて灯籠で火をたくので、「おけら火」という。

古式にのっとなって火きり臼と火きり杵できりだされた御神火は、大晦日の午後7時、除夜祭齋行ののち、宮司以下祭員によって、境内に吊された灯籠に灯され、人々の願いを記したおけら木と共に、夜を徹して焚かれる。

人々は、その「おけら火」を吉兆縄きちょうなまという竹の繊維で編んだ縄の先につけて、種火が消えないようにくるくると回しながら家まで持って帰り、神棚の灯明に灯したり、「おくどさん」(かまど)の種火にする。お正月に、この種火を使って炊いたお雑煮を食べると、1年間無病息災で暮らせると言われている。



写真2-32 おけらまいり

また、燃え残った火縄は「火伏せのお守り」として、台所にお祀りする。

大晦日の夜、八坂神社に向かう四条通りは、おけらまいりに行く沢山の人々で賑わう。境内の「おけら火」のかがり火の情緒や、吉兆縄をくるくるまわす人々の光景は、年越しの京都に欠かせない。

イ 京都の祭礼に見る歴史的風致

京都では、一年を通して各地で様々な祭礼が営まれ、これらが年中行事となって古都の四季を織りなしている。たとえば、これまでに示した祭礼などにより次のような一年を見ることもできよう。

初春は初詣に始まる。ご近所の氏神にはじまり、有名神社、なかには都七福神めぐりのバスツアーもある。十日前後になると十日ゑびすが賑わい「商売繁盛、笹もってこい」の掛け声が響く。2月の節分祭も各地で開催される。有名な吉田神社では、数多くの露店が並び活気にあふれる。4月の陽春の花のもとでの今宮神社のやすらい祭、壬生の大念仏が終わると、5月の葵祭である。

盛夏をむかえては祇園祭が、7月いっぱい市民を興奮のなかにおく。クライマックスは7月17日の山鉾巡行である。8月の京都五山送り火の頃には、夏の盛りに秋の気配を感じる。10月には平安神宮の時代祭、同じ日に鞍馬の火祭も行われる。11月が嵐山のもみじ祭とともに過ぎ去り、除夜の鐘とおけらまいりとともに年が暮れ、再び新しい年を迎える。

このように、先に例示した祭を中心にも、京都の四季が祭礼とともにあるのが分かる。

京都で行われる祭礼は、それぞれを個別に見ても町と良好な関係を築いていることが分かる。祭礼の中で、お囃子などを奏で、歌い、時には舞いながら、町の中を練り歩くものも多く、活気に満ち溢れる雰囲気のもの、平安の雅を感じさせるもの、壮大なスケールのものなど、それぞれの祭礼によって様々な雰囲気を町にもたらす。また、そこで使われる装飾や衣装は、京都の伝統産業のレベルの高さを思わせる。これらの儀礼や装飾品は、先人のたゆまない努力を感じさせ、伝統を次世代に継承していかなければならないことを感じさせる。

また、祭礼が行われる寺社の境内や参道には、露

店が立ち並ぶものも多い。これらの露店は人々のハレの日の楽しみの一つでもあり、露店の店頭でのやり取りが、活気にあふれた雰囲気をも町の中に漂わせる。中には、十日えびすの笹や、おけらまいるの火縄など、特定のものを持ち帰るのが風習になっているものもあり、それらのものを携えた人々が寺社の門前や参道などにひしめく姿も見られる。

歴史的な町並みの中で繰り広げられるこれらの営みにより、普段の落ち着いた雰囲気とは違う、彩りある雰囲気を感じさせる。

そして、葵祭りや新緑、祇園祭と夏の蒸し暑さ、おけらまいると暮れの寒さなど、それらの祭礼の到来は季節の到来でもあり、自然風景の変化や気候の変化を肌で感じながら、人々は四季折々にちりばめられたハレの祭礼を楽しみ、一年を過ごす。例に示した以外にも、京都には多くの祭礼があり、これらが一年を通じて市内各所で行われることで、四季の移ろいやそれぞれの地域の多様性を感じさせるとともに、平安時代より続く京都の歴史の奥深さを感じさせる。

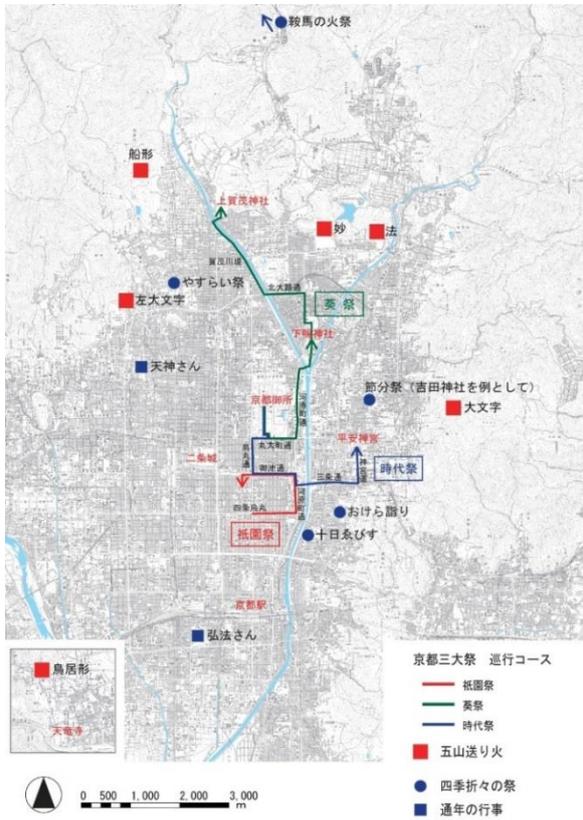


図2-26 京都の祭礼

京都の主な祭礼と年中行事

月	日	年中行事<場所>	内容
1月	元旦～	初詣	
	1～3日	おおぶくぶくちや 皇服茶<六波羅蜜寺>	
	2日	ちょうな 鉦始め<広隆寺>	奈良時代から伝わるといわれる行事で、建築関係者が1年の無事を願う。
	4日	けまり 蹴鞠始め<下鴨神社>	貴族の優美な遊びを伝える行事
	8～12日	えびす 初えびす<恵美須神社>	
	14日	法界寺(日野)裸踊り<法界寺>	
	15日に近い日曜日	通し矢<三十三間堂>	
	15日	いまくまの とんど<新熊野神社>	
	25日	初天神<北野天満宮>	菅原道真の誕生日と亡くなった25日にちなんで毎月行われる縁日のうち、1月は初天神、12月は終 <small>しま</small> い天神と呼んで、多くの出店が立ち並ぶ。
	28日	初不動<狸谷山不動院>	
2月	2～4日	節分祭<市内各神社>	
	初午の日	初午大祭<伏見稲荷大社>	
	23日	ごだいりきそんにんのうえ 五大力尊仁王会 <醍醐寺>	
	24日	さんやれさい 幸在祭<上賀茂神社>	
	25日	梅花祭<北野天満宮>	梅を好んだ菅原道真をしのんで、梅の花を供える行事
3月	14～16日	涅槃会<泉涌寺・東福寺・真如堂ほか>	釈迦の命日にちなんだ法要
	15日	嵯峨お松明・嵯峨大念仏狂言 <清凉寺>	
	最終日曜日	はねず踊り <随心院>	小野小町と深草少将の「百夜通い」にちなんで少女が歌い踊る華やかな行事
4月	8日	花まつり<壬生寺・西本願寺・真如堂ほか>	釈迦の誕生日に行われる行事
	10日	桜花祭<平野神社>	花山天皇が桜の木をお手植えされたいわれにちなむ祭
	第2日曜日	やすらい祭<今宮神社>	
	第2日曜日	ほうたいこう 豊太閤花見行列<醍醐寺>	豊臣秀吉の「醍醐の花見」を再現した祭
	13日	まい 十三詣り	
	20日以降の日曜日	神幸祭<松尾大社>	
	第3日曜日	吉野太夫花供養<常照寺>	江戸時代の吉野太夫をしのんで、太夫道中が行われる。

	21～29日	壬生大念仏狂言<壬生寺>		
	29日	曲水の宴<城南宮>	川を流れる杯が来るまでに歌を詠む平安貴族の優雅な遊びを再現	
5月	1～4日	千本ゑんま堂大念仏狂言<千本ゑんま堂(引接寺)>	京の三大念佛狂言のひとつ	
	3日	流鏑馬神事<下鴨神社>		
	5日	藤森祭<藤森神社>		
	5日	競馬会神事<上賀茂神社>		
	13日	市比賣祭<市比賣神社>		
	15日	葵祭<京都御所・下鴨神社・上賀茂神社>		
	18日	御霊祭<上御霊神社>		
	第3日曜日	三船祭<車折神社・大堰川>	白河天皇が漢詩・和歌・管弦の三船で舟遊びをしたことにちなむ行事で、船上で舞や歌を演じる。	
	6月	上旬	京都薪能<平安神宮>	
10日		田植祭<伏見稲荷神社>		
20日		竹伐り会式<鞍馬寺>		
30日		夏越祓<上賀茂神社ほか・市内各神社>		
7月	1～31日	祇園祭<八坂神社・各山鉾町>		
	7日	七夕祭<北野天満宮・白峯神宮ほか>		
	土用の丑の日	きゅうり封じ<蓮華寺>	空海が病をキュウリに封じこめたという伝説にちなんだ行事	
	25日	鹿ヶ谷カボチャ供養<安楽寺>		
	31日	千日詣り<愛宕神社>		
8月	1日	八朔	各花街などでは、家元や出入りのお茶屋へ芸舞妓が中元の挨拶にまわる。	
	7～10日	六道まいり<六道珍皇寺>		
	15～16日	松ヶ崎題目踊<涌泉寺>		
	16日	京都五山送り火<如意ヶ嶽ほか>		
	16日	嵐山万灯流し<嵐山渡月橋>		
	16日, 25日など	六斎念仏<壬生寺・吉祥院天満宮ほか>		
	23, 24日	千灯供養<化野念仏寺>		
	15日	松上げ<花脊>		
	24日	松上げ<広河原・雲ヶ畑>		
	24日	久多花笠踊<志古淵神社>		
	9月	第1日曜日	八朔祭<松尾大社ほか>	
		9日	鳥相撲<上賀茂神社>	
		中秋の日	名月管弦祭<下鴨神社>	(旧暦の8月15日に行うもの)

	中秋の日	大覚寺観月の夕べ<大覚寺>	月見を楽しむ平安貴族の優雅な遊びを再現した催し
	第3土・日・月(祝)	萩まつり<梨木神社>	
	9月下旬から10月初旬ごろ	神幸祭<御香宮神社>	
10月	1～5日	瑞鏡祭<北野天満宮>	
	体育の日と前日・15日	栗田神社大祭<栗田神社>	
	体育の日の前日	赦免地踊<秋元神社>	
	第3日曜日	二十五菩薩お練供養<即成院>	
	22日	時代祭<京都御所・平安神宮>	
	22日	鞍馬の火祭	
	11月	1日	亥子祭<護王神社>
5～15日		お十夜<真如堂>	
第2日曜日		嵐山もみじ祭<嵐山・大堰川一帯>	
23日		塩竈祭<十輪寺>	在原業平の昔のいわれにちなんだ行事
23日		筆供養<正覚庵>	
26日		御茶壺奉獻祭<北野天満宮>	豊田秀吉の「北野大茶の湯」にちなんで、新茶をいれた茶つぼを奉納する行事
12月	8日	針供養<針神社・法輪寺ほか>	
	7・8日	大根焚き<千本釈迦堂>	
	9・10日	鳴滝の大根焚き<了徳寺>	
	13～30日	空也踊躍念仏(かくれ念仏)<六波羅蜜寺>	
	14日	山科義士祭<大石神社ほか>	赤穂浪士47人の討ち入りを再現して行列する行事
	21日	終い弘法<東寺>	弘法大師の命日にあたる21日毎月行われる縁日のうち、12月は終い弘法、1月は初弘法と呼ばれ、正月準備をする大勢の参拝客でにぎわう。
	31日	おけらまいり<八坂神社>	
	31日	除夜の鐘<知恩院ほか各寺院>	

(2) 京町家の暮らしと地域コミュニティ

町なかに多く残る京町家は、京都の伝統的な都市住宅の建築様式を今日に伝え、京都の魅力的で個性的な町なみ景観を形成する重要な要素となっている。また、京町家は人々の暮らしや生業を支えるケの場であるとともに、人々の暮らしの中で営まれる祭事などのハレの場でもある。京町家に住まう人々は、それらのハレとケの営みや自然とのかかわりの中で、京町家のしつらえを様々に変化させ、めりはりある暮らしを営んでいる。

例えば、掃き清められ打ち水されたオモテ、軒先に掲げられた祭提灯や幔幕、格子をはずして家宝を飾る祭座敷など、まさに町衆の暮らしの文化を感じる。また、軒先に掲げられた屋号を染め抜いた暖簾、もれ聞こえてくる機織の音、染の染料の匂い、店の間に飾られている様々な伝統工芸品など、ものづくりや商いの文化を感じ、そして、通りを挟んで育まれてきた同業者町のつながりを感じる。このように、京町家は、京都の永い歴史の中で育まれてきた様々な都市居住文化を今日に引き継いでいる。

この項では、京町家という歴史的建造物についての概要と、京町家を取り巻く地域の自治の歴史、現状について示した後、京町家の暮らしに見る歴史的風致を示していく。

ア 京町家と地域コミュニティの概要

現在京都に残る京町家は、概ね昭和初期頃までに建設されたものである。図2-27は市街地の変遷を示しているが、中心からピンク色に塗られた部分は昭和13年（1938）頃の市街地の範囲を示しており、この区域に多く残っている。

京町家は、木造軸組の伝統構法による戸建、長屋の都市住宅であり、瓦葺で平入りの大屋根を持つ。また、ベンガラ塗りの大戸、木格子戸、格子といった特徴的な外観を有し、軒を連ねて通り景観を構成している。

(7) 京町家の歴史

その起源は、平安時代中期の10世紀ごろとされている。律令制度の衰退と共に地方から徴用されてものづくりや商いを営んでいた人々が都市住民として定着するようになり、自らの意志で自らの生活のためにもものづくりや商いを営むようになってきた。こうして徐々に力を付けてきた都市住民は、自らの暮らしの拠点を大路、小路に面した

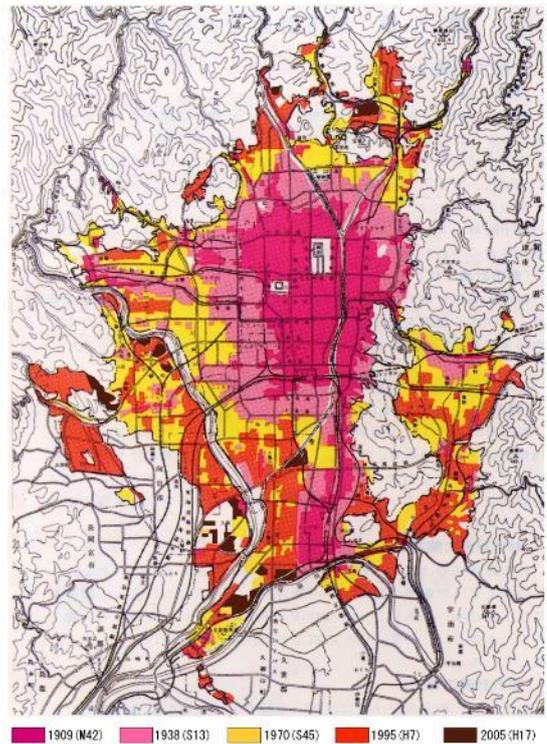


図2-27 市街地の変遷

空間に求め、築地塀にもたれ掛けて小屋を造った。これが京町家の始まりであるとされている。

更に力を付けた都市住民は、公家から通に面した屋敷地の一部を買い取り、築地塀を壊し、通りに面した建物を建築するようになる。こうして通りに開いて商売を行う京町家の原型は、軒を連ねて建ち並び、その店に用事のある都市住民が頻繁に通りを往来するようになる。

通りは、単に通行の用に供する都市施設ではなく、コミュニティの場となり、会話や祭などが営まれ、ついには公衆便所のような施設さえ見られるようになり、通りを挟んだ両側町というコミ

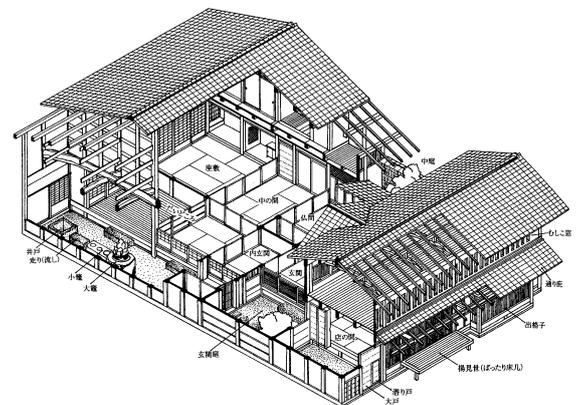


図2-28 京町家のつくりの例「表家造」

イラスト：谷直樹・増井正哉「まち祇園祭すまい」思文閣出版1994年



写真2-33 西陣の通り



写真2-34 織屋建て



写真2-35 茶屋様式

京町家の特徴の一つである格子も商いの業種によって様々に異なる。代表的なものは「糸屋格子」といって、糸屋、紐屋、呉服屋などに見られる格子である。糸や織物の色柄を見極め易くするため、格子の上部が一定の本数ごとに切り取られ採光に配慮した格子となっている。その切り取られた格子の本数によって、織屋4本格子、糸屋3本格子、呉服屋2本格子など、業種に応じて採光率が調整されている。「酒屋格子」は、酒樽が当たっても壊れないように頑丈に作られており、2寸4分×1寸4分の格子を2寸4分間隔で立て、2寸7分×3分の貫で留めた粗格子にベニガラを施している。その他にも「米屋格子」「炭屋格子」「麩屋格子」などがあり、今でも通りを歩くと往時の商いがしのばれ、同業者の町であったことなどが分かる。



写真2-36 糸屋格子

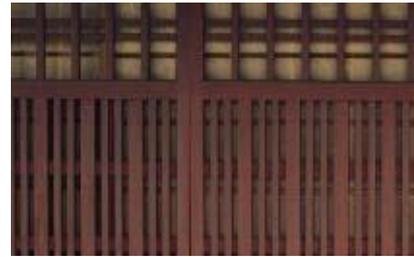


写真2-37 お茶屋格子



写真2-38 米屋格子 出典 三点共「京町家の再生」

(イ) 自治の始まりと町式目ちょうしきもくの成立

京町家に暮らし始めた町衆は、通りを挟んだ両側町のコミュニティを形成し、幾つかの町が集まって町組を形成した。戦国乱世の時代には幾つかの町が集まって公家や武家に入出入りする「上の京」と商人のまちである「下の京」を形成し、それぞれが自主的に柵と門の「惣構そうがまえ」で町を囲み外敵の進入を防いだ。これが自治の始まりである。

泰平の世が訪れた江戸時代に京都は幕府の直轄領となり、京都所司代の支配下に入ったが、町、町組による自治は大幅に認められていた。

当時は、現代ほど移動の自由はなかったとされるが、比較的頻繁に居住者は入れ替わっていたことが記録されている。50世帯ほどの町内で、年に2世帯ほどが入替わっていた。このように、頻繁に人が入れ替わる状況で、町の自治を継続的に実施するためには、町の暮らしのルールを明文化する必要に迫られ、これが「町式目」「町定」として古文書に残されている。

この「町式目」「町定」は町毎に様々な取り決めがなされており、新しく町に入ってくる人のコントロールに関する規定、町自治の財源、町会の開催規定などは、ほとんどの町で定められている。同業者の町では同業者、異業種が集積する町では異業種の者しか転入を認めず、しかも、若狭や近江など、地域に住まう人々の出身地から、縁故を頼って転入してくるのが一般的であったようである。お互い様で、分を守る京都の町衆ならではの知恵である。

主要な自治の財源は、20分の1税ともいわれ、新たに町内の土地・建物を購入して転入した者が、その不動産価格の20分の1を町内に納めることとされた。そのほかに、各家から応分の負担を求めており、その額は、借家、持家によって、あるいは間口によって異なる合理的なものであったようである。

その他にも、町内で発生した火災時の対応方策（通りの防火井戸の管理、消火活動に参加しない家への罰金）や宅地のレベル設定、隣家同士の妻面の屋根の処理方法、町内の孤児の養育に関する規定などが細かく規定されていた。

また、通りが交わる辻には木戸門と番屋が設けられ、防犯のため夜間は閉鎖された。こうした辻の修理費用や番屋の番人の費用なども規定を設けて町が負担をしている。

京町家の建築様式は、直接的に町式目に規定されたのではないが、こうしたお互い様で、分を守るにより秩序を維持していくという自治のルールを背景に、建築技術の標準化、合理化が図られた結果、統一感のある建築様式が確立した。

(7) 現代に生きるコミュニティ

明治の中央集権政府もこうした自治組織を積極的に活用した。町組みを改組して番組を作らせ、町の自治に取り組みさせた。明治時代に定められた町式目にも、自治に必要な財源として独自の税を徴収することが規定されていた。

何よりも重要な出来事として、都が東京に移ることにより京都が衰退することを懸念した町衆が、資金を工面して全国初の小学校を設立したことである。子供たちの教育に京都の将来をかけたのである。当時、66あった番組に64校が設立され

た（2町共立の小学校が2校あった）ことから、「番組小学校」と呼ばれている。

この小学校は、単に子供たちの教育の場であっただけでなく、戸籍事務や自治活動の寄り合いなど番組の役場や大人たちの生涯学習の場でもあった。そして各番組では、この施設の維持、教員の確保、自治事務の費用を捻出するため、小学校会社を設立し、子供がいるいないに係わらず、番組内に居住する町民から「^{かまどきん}竈金」と呼ばれる竈別小学校運営出資金を徴収し、地域の商店等に資金を貸し出し、その利息を小学校の運営資金とした。地域で小学校を運営する活動は、番組が学区と改正されて以降も続き、昭和16年（1941）に学区制が廃止されるまでは校地の拡張や校舎の建替等は学区民が負担をしていたのである。

旧市街地の辻には近代洋風建築の理髪店が多く見られるが、これは、明治期に学区の財産であった旧番屋を床屋に貸して土地活用をしていた名残であり、今日でも理髪店は町の情報センターであり、町の様々な情報が行き来する場になっている。

今日、64校発足した番組小学校は、戦後の学制改正で11校が中学校となり、また近年は小学校の統合などにより約半数は通学単位ではなくなっているが、元学区として自治活動の単位に位置づけられている。元学区単位で体育振興会、消防団、自主防災会、女性会、老人会、学童補導委員会、民生委員会、交通対策協議会などの自治活動



図2-31 京都番組区画図（明治2年正月晦日改正）
作成 京都市学校歴史博物館

に活発に取り組み、小学校、あるいは小学校の跡地を自分たちの自治活動の拠点として大切にしている。

学校統合により閉校となった後も、地域の会合や夜間スポーツ、消防団の訓練、バザー、祭り、運動会など多様に活用され、まちの活性化に貢献しながら、以前と変わらず地域のシンボル・自治活動の拠点として、元学区の自治連合会などの自治組織により大切に活用されている。



写真2-39 京都芸術センター
(旧京都市立明倫小学校 (国登録有形文化財))

イ 具体事例

ここから、歴史的建造物である京町家と、そこで暮らす人々の生活、そしてそれを支える地域の自治活動に見る歴史的風致を示していく。

(7) 京町家の知恵：四季の自然や祭事とのかかわり

高密度に居住する都市にあって、京町家は、自然と付き合い自然を暮らしに取り込む工夫を重ねてきた。建物の側面を隣家と接する京町家が自然を取り込む場所は、通りに面した表と裏庭、天空の三箇所しかなく、表通りに面しては格子を、裏には庭を、そして天空には通り庭に天窓や高窓を設けている。

奥の庭には植栽が施され、表の通りとの温度差により人工的な風の流れを屋内に取り込み、更に奥行きのある京町家では中間に坪庭を配置し、その効果をいっそう高める工夫がなされている。蒸し暑い夏に表の通りから一步、通り庭に入ると、ひんやりとした風がほてった身体に心地よい。そして、裏庭の植栽は、その街区全体で連担することによりグリーンベルトを形成し、風の道として温熱環境の向上に貢献している。

また、坪庭、奥庭、火袋の高窓などからは、その日、その時の微妙な風や光の変化や雨音を伝え、

時の移ろいや四季の変化を感じ取る暮らしをもたらす。更に、四季折々の庭の植栽の移ろいは、西陣織や京友禅の美しい色や柄を創造する美意識を培ってきた。

このような京町家の構造的な知恵とともに、四季の移ろいに対応する、住まい手の暮らしの知恵がある。

6月、昼間に暑さを感じるようになる頃に、夏のしつらえに変更される「建具替え」が行われる。「建具替え」とは、襖や障子を葦戸や簾よしどに替えたり、畳の上に籐でできた敷物を敷いたりすることで、冷房設備の発達した現在でも、夏を涼しく過ごす工夫として行っている。葦や籐という素材は、肌ざわりがひんやりと心地よく、見た目にも涼しげである。夏のしつらえは9月いっぱい続き、元の障子や襖に戻す。

打ち水は、かつては京の町家で朝夕、門掃きとともによく見た光景である。ひしゃくでバケツの水をすくって道路に丁寧なまいて、砂埃の舞い上がりを防ぐ。それが、夏には涼をとる手段となる、先人の知恵である。



写真2-41 坪庭 (幻菴)



写真2-42 奥庭 (巽家)

出典 共に「京町家の再生」



写真2-43 火袋（小島家）出典 「京町家の再生」

また、京町家の暮らしには、四季の変化と関わりの深い暮らしの祭事があり、それに合わせて京町家も装いを変える。祭りには通りに面した格子を外して祭り座敷に、また、正月には正月飾り、桃の節句の雛人形、端午の節句の鎧兜、七夕、重陽の節句などのしつらえを施すなど、日々の暮らしにリズム感や潤い、けじめをもたらし、暮らしの文化を形成してきた。今日でも、その習慣は継続されている。

こうした暮らしの祭事は、様々な道具としつらえを施す部屋を必要とするが、そのための専用の部屋を設けることなく、そのつど必要な道具を広げることにより、その用途の部屋として利用してきた。このため、通常は部屋に道具を置かず、押入れや蔵に片付けておき、必要な時に必要なものを持ってきて広げるといった生活様式を育み、一つの部屋を多様に使ってきた。これらの道具の出し入れや掃除、しつらえの変更などの営みが、家族

総出で行う年中行事として生活の中に溶け込んでいる。

このような、自然とのかかわりの深い暮らしは、その暮らしを家族全員で支えていくことが求められ、また、祭事を親から子へと継承していくことを通じて接客の作法や家族の協力を学び取るなど子供の教育に大きな役割を果たし、暮らしの文化を伝承していく大きな装置となっている。

そして、自然と共生する暮らし、四季の移ろいの中での日々の暮らしや祭事はしつらえや日々の暮らしの風景を通じて京の町を歩く者にも四季を感じさせる。

(イ) 京町家の知恵：地域とのかかわり

格子と通り庭によって内と外を繋ぐ京町家は、扉一枚で内と外を区切っている現代建築と異なり、内と外は融通無碍ゆうずうむげで変幻自在である。

平入りの大屋根と1階に設けられた深い通り庇は、京町家の外観の特徴の一つであるが、それらは、土壁に雨が吹き付けることを防止すると同時に、夏の強い日射を遮り、冬には太陽光の恩恵を屋内に導いてきた。そして、その通り庇の下しょうぎの空間は、今日でも雨宿りの場であり、ぼったり床しょうぎを出して商品展示や休憩の場として、さらに、ある時は幔幕まんまくを張ってお祭りの空間として、多様に使われ、公的な通り空間と私的な居住空間をつなぐ半公共的な空間を形成している。

格子は機能面でも優れており、道ゆく人からは内側が見えにくいですが、家の中からは外の様子がよく見えるようにできており、柔らかい防犯装置としての機能を持っている。一方、その店の様子を知りたい人には、その前に立ち止まると中の様子



写真2-44 夏のしつらえ、冬のしつらえ（幻菴）

出典 「京町家の再生」

がよく見えるようにショーウィンドウの役割も果たしている。

更に、通り庭は店の一部や接遇の場として、やわらかく外に開いている空間である。

通り庭のうち、屋内に入ってすぐの部分は誰でも入れる場所であり、どんな用事の人でもまずはここまで入って来意を告げるのである。多くは立ち話であるが、少し話が込み入ってくると表の間に腰掛けて話し込み、お茶の一杯でも接遇がなされる。さらに通り庭を奥に進み、台所と一体になった空間は、家族の食事や団欒の場である中に面しており、相当に家族と親しい人が立ち入る場である。

このように通り庭は、屋内にあっても半公共的な空間であり、靴を脱ぐことなく大方の接遇はこの場でなされ、家族の多くの者が接遇を共有することにより、家族ぐるみの町内付き合いを支え、コミュニティを育んできた。

また、通り庇や格子、通り庭によって内と外との間の流動的なつながりが生まれることによって、通りもまた、暮らしと離れた場所として存在するのではなく、生活空間の一部として、更には地域の交流の場として利用される。そこは、子供の遊び場であり、大人の社交場でもある。

このように、地域とのかかわりの知恵として形成された、半公共的な空間を持つ奥行きのある京町家の構造と、そこに見ることのできる人々の暮らしや通りでの営みが京町家の町並みと一体となって、京都の長い歴史の中で培われた都市居住の文化が今でも日常として息づいていることを感じることができる。

(7) 地域住民の絆を強くする身近な仕組み

通り庭という半公共的な空間を持つ京町家は、旧市街地の豊かな地域コミュニティーを象徴する存在である。京町家に住む人々は、日ごろから家族ぐるみの町内、学区の付き合いを行い、互いに小学校の同窓生であり、同業者であり、神社の氏子として祭りを共有し、子供の時から町の子供として育ってきた。このため、自治活動への参加も、特別なことではなく、町内の役に立ちたい気持ちからの自発的な行為である。

このような地域コミュニティーにおいて受け継



写真2-45 正月飾り (町家写真館)

出典 「京町家の再生」



写真2-46 ぼったり床几

出典 「京町家の再生」



写真2-47 格子を通した町とのかかわり

撮影 水野 克比古



写真2-48 通り庭 (町家写真館)

出典 「京町家の再生」



写真2-49 通り空間の暮らし1 (下京の路地)

出典 「京町家の再生」



写真2-50 通り空間の暮らし2 (三上家の路地)

出典 「京町家の再生」

がれてきた地域交流の仕組みとして、町内で行われる「地蔵盆」と元学区単位で行われる「学区民の体育祭」がある。

a 地蔵盆

京都の町中を歩くと、いたるところに美しい季節の花が供えられた「お地蔵さん」に出会う。お地蔵さんは子供たちの健やかな成長を見守ると同時に、まちの鎮守としても親しまれており、各町内に少なくとも1体の「お地蔵さん」が祀られている。立派な京町家の一角に、あるいはマンションの一角に、大きさも祀る社も様々であるが、美しい花が絶えることはない。決まった人がお世話をする人が多いが、その人が亡くなられた場合などには、当番でお世話をするケースも増えている。朝な夕なに道行く人々が手を合わせて通り過ぎてゆく光景は、特別なものではない。

8月下旬に催される「地蔵盆」は、どこの町内でも必ずといっていいほど行われている夏の終わりを告げる京都の風物詩である。地蔵信仰は平安末期から貴族の間で広まり、次第に民間でも石地蔵尊を祀るようになった。地蔵菩薩は地獄の鬼から子供を守るという信仰により、この日子供のための行事を行う習慣が生まれた。江戸時代にはもっぱら「地蔵祭」と呼ばれていた。

本来、地蔵菩薩の縁日にあたる8月の23、24の両日に行われる会式のことを「地蔵盆」というが、近年は、勤め人が多くなったことから、その前後の土曜日、日曜日に催すことが多くなっている。

毎年、地蔵盆が近付くと、町内の人々は地蔵盆の準備に追われる。前日には、お地蔵さんを清め、お祭りの飾りを施す。多くは、警察の許可を得て、路上でお飾りを施す。中には、地蔵盆用に確保した個人宅で飾る場合もあるが、通りからもお参りが可能なようなしつらえになっている。中央の地蔵をきれいに飾りつけ、花や、お神酒、ご飯、山海の恵みを飾り、赤い幔幕を張りまわす。さらに、子供たちの名前が書き込まれた提灯がその周りを取り囲むように飾り付けられ「地蔵盆」の雰囲気盛り上げる。

当日は、子供たちのため、金魚釣り、西瓜割りなど様々な催しを工夫をこらして行う。このうち、「^{ふごお}畚下ろし」と言われる福引きが行われているところもある。これは、家の2階に景品が入った多くの袋が備えられ、その端から紐が伸びて滑車をくぐって表通りで東ねられる。子供たちは、順番に紐を選んで手元に引き寄せる仕組みである。古くは余興に浄瑠璃もあった。

そして、近くのお寺から僧侶に来てもらって読経をあげてもらうなど、子供たちの健やかな成長を祈念する。町中では、今でも「^{じゅずく}数珠繰り」を行う風習が残っているところもある。通称「百万遍の数珠廻し」と言って、子供たちが、直径2～3メートルの数珠を持って車座に座り、導師の読経に合わせて数珠を廻す。

そして夜にはお地蔵さんの前に大人が集まり、子供たちのこと、時にはまちづくりのことなど様々な会話を繰り広げ、日頃お付き合いの

ない人同士も打ち解ける交流の場となる。

このように、町内のハレの場である地蔵盆は、古くから子供同士のコミュニケーションの場であると共に、通りから傍観できる場所にしつらえられ、飾られたお地蔵さんや、町内の人々の協力により成し遂げられる様々な活動が、地域コミュニティーの象徴である京町家の町並みと一体となって、そこに住み続ける住民の強い思いと絆を深める場となる。



写真2-51 お地蔵さんとお花

出典 「京町家の再生」



写真2-52 地蔵盆(西陣)

出典 「京町家の再生」

b 学区民の体育祭

天高く晴れ渡った秋の空の下、学区民が資金を出し合って建設した小学校の校庭には、万国旗が飾られ、多くのテントが立ち並び、行進曲がこだましている。学区最大の催し、学区民の体育祭である。

学区民の体育祭は、各学区の体育振興会が中心となって、学区単位で行われている。各学区の体育振興会は、その多くが昭和20年代後半

に結成されており、昭和32年には160学区に体育振興会が出来上がった。学区民の体育祭は、設立後間もない各学区の体育振興会の行事の中で、人々にもっとも印象付けたものであった。学区によっては、体育振興会設立前から開催しているところもあり、学区民の体育祭は50年以上の歴史を持つところが多い。中には戦前からの歴史を持つ学区もあり、町組以降の自治活動の活発さがうかがえる。そして今なお、各学区における最大の催しとなっている。

体育祭の開催には、地域の様々な人々の協力が必要である。学区の体育振興会の役員と各町内会の体育委員はもちろん、学童保育委員、PTA、消防団など関係する団体との連絡調整を行う。運動会当日には、本部役員と町内委員、総勢1000名余で運動会を支える。

体育祭当日の開催内容は、各学区で様々である。できるだけ多くの町民に参加してもらうため、プログラムは、お年寄りにも子供にも楽しめるように準備されるなど、工夫が凝らされている。競技が始まると運動場や町なかに歓声が響きわたる。

半世紀を越える歴史の中で、プログラムは時代や参加者の年齢層などに合わせて様々に変化しているが、参加する人々の歓声やまちの活気、そして運営する人々の意気込みなど、変わることがない。そして、体育祭の運営、参加を通して、地域の人々が係わり合い、ふれあうことで、地域の自治活動が更に活性化するのである。これらの営みが、地域のシンボルである小学校や周辺の歴史的町並みと一体となって、地域の結束が伺え、また活気あふれる町並みを形成し、地域に住み続けようとする意識を向上させる。

ウ 京町家の暮らしに見る歴史的風致

これまで示したように、京町家には自然や祭事とのつながりの中で感じさせる四季折々の表情がある。また、地域とのつながりを大切にしたい住まいとして、半公共的な空間を持ち、奥行きを感じさせ、そこに人々が営む暮らしが垣間見える。

そして、この一つ一つの京町家が地域とのつながりを持ち、それらが町並みを形成することで、通り

を介した両側町の風情が生じる。地域とのつながりは、地域の自治活動という形で更に広がり、「番組小学校」を自治の核とする元学区となる。

一つの京町家、両側町、元学区というそれぞれの広がりにおいて、今日まで長年にわたり受け継がれてきた日常的な暮らしや自治活動、例に示したような行事等により住民の結束が図られる。さらに、これらの営みが継続されることによって、地域の間みや親しみを感じさせるとともに、歴史的な町並みを守ろうとする意識が住民の中に育まれている。

(3) ハレの場と伝統を引き継ぐ歴史舞台

京都御所や二条城は、都としての歴史の中で、政治や文化の拠点であり、歴史を動かした様々な局面の舞台となった場所である。そして、そこに存在する建造物や庭は歴史的遺産として大切な国民的財産であり、それらを引き継ぎながら、今日ではハレの祭事や催し、日常(ケ)の憩いの場として市民に親しまれている。

これらの歴史的遺産が憩いの場やハレの舞台として市民の暮らしに密接に関わることは、歴史と文化が京都の人々に息づくための重要な役割を果たしている。人々は、知らず知らずのうちにその価値を学び、感性や美意識の形成に大きな影響を受けている。

また、そうした歴史的遺産を保全・継承する技がこれらの場で受け継がれることで、京都の伝統技能の継承と発展に寄与しており、それらの技の発展が歴史遺産の保全・継承を担うという相互関係を形成しているのである。

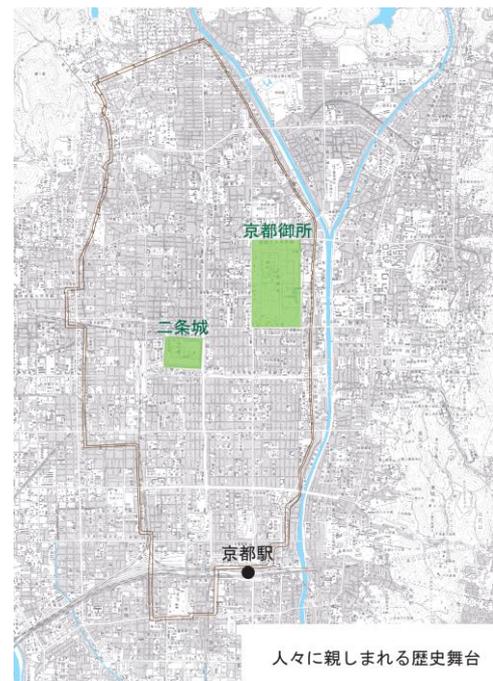


図2-32 京都御苑・二条城 位置図

この項では、これらの歴史舞台の今と昔を示し、そこに形成される歴史的風致を示していく。

ア 京都御苑

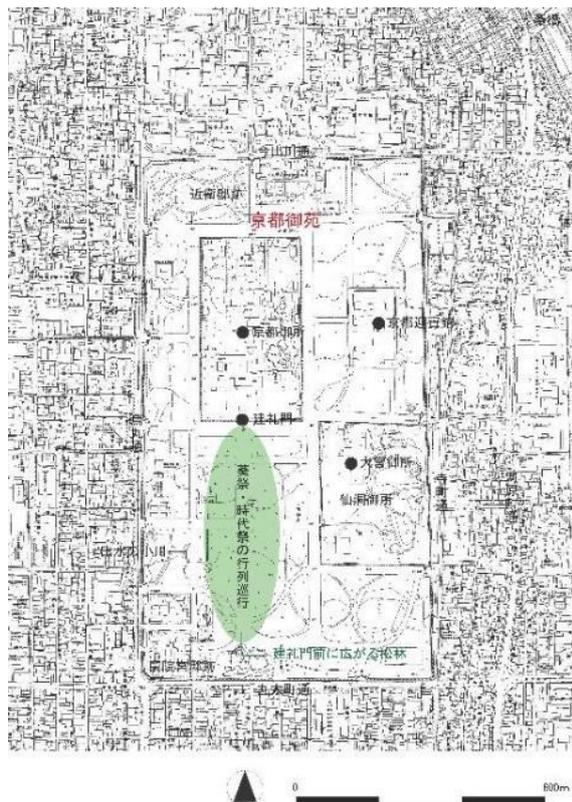


図2-33 京都御苑

(7) 京都御苑の今と昔

京都御苑は、京都御所、京都大宮御所、仙洞御所等の敷地を除いた面積約63haの国民公園で、いつでも自由に入ることができる。東西約700m、南北約1,300mの広大な敷地は、江戸時代には200もの宮家や公家の邸宅が立ち並んでいた。

平安京の内裏（皇居）は現在の京都御所から2kmほど西にあったが、度重なる火災のため他の地に里内裏が置かれるようになった。現在の京都御所は、里内裏のひとつであった東洞院土御門殿に由来し、14世紀の末に皇居に定まった。

明治2年（1869）、明治天皇の東京遷幸に伴い、多くの公家達も東京に移住したため、明治天皇より御沙汰が下され、明治10年に京都府がこれらの邸宅跡地の整備に着手した。整備内容は、公家屋敷の撤去、外周石垣土塁工事、苑路工事、樹木植栽等であり、明治16年には概ね現在の状況に整備された。

この頃、京都では明治5年の第1回を皮切りに、京都博覧会が開催されていた。京都御苑においても第2回以降大宮・仙洞両御所で行われ、明治1

4年には御苑内の東南の一角に常設会場が設置され、以降明治30年に岡崎に博覧会館が建設されるまで、その場所で開催された。当時の京都御苑はこのような形で市民とのつながりを形成していた。

戦後、京都御苑は、その由緒ある沿革が尊重され、努めて現状の回復保存が図られるとともに、国民公園として広く国民に開放し利用されることとなった。その後、従来からの御所の前庭としての景観維持や都市公園的な役割に加え、大都市の中の広大な緑地としての自然環境を保全し、自然とのふれあいを推進していくという新たな役割が重視されるようになってきた。



写真2-53 開かれた門



写真2-54 御苑の桜

今日、京都御苑では、公家町が形成されていた当時からあったことを偲ばせる樹齢数百年の樹木や、整備後植えられた樹齢130年の木々が、歳月を経て多様で豊かな樹林を形成している。近衛邸跡のイトザクラや出水の小川周辺などのサトザクラ、ウメ、モモなどの花木、モミジやイチョウなどが季節毎に御苑を彩り、訪れる人を楽しませる。これらの苑内に生育する樹木は約5万本と言われ、苑内に生育する植物は500種を超える。野鳥もオオタカが餌場として利用するなど100

種以上が確認され、50種を超えるチョウや400種を超えるきのこ類が確認されるなど、驚くほど豊かな自然の生き物たちを見ることができる。

(イ) 京都御苑に見る歴史的風致

日々の御苑は、賑やかではあるが穏やかで節度のある雰囲気が漂い、都心部の近傍に位置するにもかかわらず、どこことなく静寂を感じさえもする。市民は、四季の移ろい豊かな御苑で、サクラや紅葉を鑑賞しながらの散策、植物や野鳥、きのこなどの自然観察など様々に楽しむことができる。また、御苑内には公家屋敷の遺構も残り、御苑の南西にある閑院宮家の邸宅跡は、京都御苑の自然や歴史を学べる収納展示室となっているほか、九條家遺構「拾翠亭」は一般に公開され、お茶会や句会などにも活用されるなど市民の親しみの場所となっている。市民は、京都御苑という存在を尊び、歴史の舞台が自分たちの暮らしの舞台であることに誇りと喜びを持っている。

そして、5月の葵祭や10月の時代祭には、そんな日常の場がハレの舞台に一変する。煌びやかな装束に身をまとった市民が、京都中から集合し、それを見送る祭の関係者、彼らに連れられた芸妓や舞妓などが晴れやかな祭の日を演出する。

また、京都御苑は伝統の技を受け継ぐ人々の活躍の場でもある。歴史的な建造物が多く残る京都御苑の施設や風景を維持していくためには、伝統の技を駆使していく必要があり、そのためには伝統の技を持つ職人たちも不可欠である。

苑内には、御所周辺を中心にマツが多く植栽されており、建礼門前に広がる松林は、御苑の中でも代表的な風景の一つである。落ち着いたマツの剪定にあたっては、「透かし」という技法が取り入れられている。広大な苑地では、ふところ枝を大切に残しながら風通し良くし、自然風に仕立てられる。高木のマツは、長柄という4～5mの竹竿の先にカマやノコを取り付けた道具を使用する。公家邸庭園跡など狭い空間では、限られた空間に収まるようにするため、5～6月に行われる「ミドリ摘み」(新芽を摘むこと)と11～2月に行う「もみ上げ」(古葉を取り除くこと)が非常に大切な作業である。

京都御苑におけるマツの手入れがいつごろから

の技術であるかは定かではないが、大正大礼時の写真からは、自然にのびのびと枝が垂れているように仕上げる技法が見て取れ、おそらくこの頃からの技法が現在も引継がれているのではないかと推測できる。

また、平成17年(2005)、御苑に迎賓館ができたが、その建築に際しては、京都の伝統の技の粋を集めた。大工、左官、造園はもとより、建具、指物、唐紙、和紙、^{さいきん}截金、漆、京焼、金属工芸、織物、染などである。さらに竣工後も、彼らが維持管理に関わる仕組みをつくり、日常的なメンテナンスに取り組むことにより、伝統の技の継承と発展に役立っている。特に造園は、毎日の手入れが大切であり、若い職人も熟練した職人を手伝えることにより、少しずつ技を学んでいくことが期待されている。

このように、京都御苑は日常的には市民の憩いの場となり、祭事が行われる際にはハレの舞台となり、その広大な敷地や京都御所などの歴史的な建造物と一体となって歴史を感じさせている。また、そこで行われる伝統の技を受け継いだ営みは、歴史舞台である歴史的遺産と一体となって洗練された伝統ある技術の粋を感じさせている。そして人々は、京都御苑と関わりを持つことで、知らず知らずのうちに歴史の重さや伝統に裏付けられた美意識を培っていくのである。



写真2-55 京都御苑 (航空写真)

イ 二条城

(7) 二条城の今と昔



図2-34 二条城

徳川家康が諸大名に造営を命じ、将軍上洛時の京都宿所として建設した。第3代将軍家光が伏見城の遺構を移すなどして増築を行い、寛永3年（1626）に現在の規模になり、後水尾天皇の行幸を得た。その後、30万人の大軍を率いて上洛した家光を最後に、幕末までは政治の表舞台に登場することはなかった。幕末、第14代将軍家茂が家光以来、230年ぶりに上洛して、再び政治の表舞台となり、第15代将軍慶喜の時に二之丸御殿の大広間において大政奉還が宣告された。

明治初期には京都府庁として利用され、その後、宮内省の管理となり、大正天皇御大典の儀式などに利用された。昭和14年（1939）に京都市に下賜され、市民に公開されるようになった。

二条城は、城全体が国の史跡に指定されている他、二之丸御殿が国宝に、22棟の建造物と二之丸御殿にある計954点の障壁画が重要文化財に、小堀遠州の作と伝わる二之丸庭園が特別名勝に指定されている。さらに平成6年（1994）には「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコの世界文化遺産に登録された。

二条城の魅力は、二之丸御殿の建築様式、二之丸・本丸・清流園の各庭園、あるいは狩野派による障壁画等様々あるが、外から望むと、漆喰壁の門や櫓、石垣、それを取り囲む水堀と堀沿いの松

の植栽と、堀沿いのピラカンサの緑が昼間の日の光に映える姿が魅力的である。また、夜には東大手門がライトアップされ、夜の京都の町のアクセントとなっている。



写真2-56 二条城 提供 元離宮二条城事務所

(イ) 二条城に見る歴史的風致

日常的には市民の散歩の場であり観光地である二条城だが、ハレの催しが定期的に行われる場でもある。その一つが清流園を会場に開催される茶会である。春は市民煎茶の会、秋には市民大茶会が、それぞれ3日間開催される。どちらも平成21年で55回を迎え、半世紀以上も続く二条城の恒例行事として定着している。

また、サクラの名所としても有名であり、サクラの美しい時期に合わせて、城内のライトアップが行われる。秋には二条城の魅力をアピールするため、二条城の建物や庭園を巡るなどの他、様々な催しを行う「お城まつり」が開催されている。

そして、二条城も京都御苑と同様、伝統の技を受け継ぐ人々が活躍している。

二条城では、昭和14年（1939）、京都市に下賜されて以降、二之丸庭園・本丸庭園・清流園は市の職員が中心となって維持管理を行っている。

二条城の樹木のほとんどは江戸時代後期以降に建物が取り除かれた跡地や周囲の土手に植栽されたものと推定され、樹齢150年以上経過したものもある。

クロマツ、アカマツは樹木総数の約1割を占め、二条城の庭園木の主たるものといえる。マツは二之丸御殿本丸御殿の書院造りの建物や、その他城郭建造物の景観に欠かせない存在であり、堀端のものは、城の風情を醸し出す道具立てとなってい

る。

また、二之丸庭園や本丸庭園のマツの樹姿は、宮内省時代から今日に引き継がれている技術により手入れを行っている。庭園に携わる専門家が長期にわたって、絶えず目を行き届かせているので、昔と変わらない優美な姿を保ち続けているのである。

さらに、二条城には、幕末の古写真には既に存在が認められているソテツがある。ソテツは南方系の植物で寒さに弱いため、毎年12月初旬頃に、ソテツの幹全体に、こもやワラなど巻く防寒養生を行っており、この手法は宮内省所管時から引き継がれ、少なくとも約70年以上も続けられている庭園管理作業の一つで、二の丸庭園の冬の風物詩となっている。

同じように、国宝の二之丸御殿をはじめとする文化財建造物も、常駐の技術者が、定期的に破損の状況を確認しており、必要に応じて伝統的な技術を用いた修理を行っている。文化財建造物の修理では、専門的な知識と経験が求められる。できるだけ当初材を残す必要があるし、部材を取り替える場合でも、伝統的な部材の組み方をしたり、伝統的な材料を用いたりする必要があるからである。

このように、二条城では、庭園や建物に携わる専門家が常駐・管理しているからこそ、昔と変わらない姿を保ちながら、伝統的な整備・修理技術の伝承が可能になるのである。しかし、当然のことながら、常駐・管理する専門家だけで二条城の庭園や建物を守れるものではなく、庭師や大工・左官等の職人の協力は不可欠である。京都には、このような職人がまだ数多く残っており、それらの職人の協力を得ながら二条城は適切に維持されているのである。

このように、二条城では茶会等の催しが開催され、これらが歴史的な建造物や庭園などと一体となって、文化の薫り高い京都の伝統の深さを、また、伝統の技をもつ常駐の専門家などによる維持管理の活動は、その営み自体が伝統の技の高さを感じさせるとともに、二条城全体の文化水準の高さを感じさせている。



写真2-57 マツの手入れ

提供 元離宮二条城事務所



写真2-58 マツの手入れ（手元）

提供 元離宮二条城事務所



写真2-59 ソテツの養生

提供 元離宮二条城事務所



写真2-60 養生後

提供 元離宮二条城事務所